次二回文樂若手特別興行

文樂座人形淨瑠璃

一部金十五錢

文樂座 四ツ橋

新秋九月の爽涼陣

第二回文樂若手の競演

興趣溢るゝリーグ式番組

秋の七草のはや咲き初めて新鮮味豊かな今日此頃みなさまにはいよ〳〵御健康にあらせられお欣び申上げます。文樂座人形淨瑠璃も七八の二ケ月間を東京または京神の地に喝采を博し此度第二回若手特別興行の下に意氣高らかな大奮闘をいたします。番組も第一回より第四回までリーグ式に替り競演する興味津々のものでございます。非常時日本の只今國民思想涵養に旺盛なる精神力助長に恰好の郷土藝術の粹文樂人形淨瑠璃を御鑑賞下さい。

昭和八年九月

文樂座

昭和八年九月九日初日

初　日　午後　三時開幕
二日目より　午後　四時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席　御一名　金二圓
お席席（お直りは（金三十錢上り）
二　等　席　御一名　金八十錢
三　等　席　御一名　金四十錢

一等お座席
一等椅子席は五日前より
前賣切符發賣致居候

前賣切符
專用電話　南四七一一番
電話　南七四〇八番
三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越を願しひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

長三八〇三番
四九九四番
四九九四番
(44)土佐堀

第二回

文樂若手特別興行

九月九日初日

（二十日まで十二日間）

豫定時間表

（二日目よりの各語り場時間です）

生寫朝顔日記 明石舟別より宿屋大井川迄

舟別れの段（四時より四時二十分まで）

幕間五分間

宿屋より大井川（四時廿五分より五時三十分まで）

幕間十分間

鎌倉三代記 三浦之助母閑居の段

閑居の段（五時四十分より七時十分まで）

幕間十五分間

艶容女舞衣 酒屋の段

酒屋の段（七時廿五分より八時廿五分まで）

幕間十分間

双蝶々曲輪日記 引窓の段

引窓の段（八時廿五分より九時四十分まで）

幕間十分間

御所櫻堀川夜討 辨慶上使の段

辨慶上使の段（九時五十分より十時五十分まで）

語り場	第一回	第二回	第三回	第四回
生寫朝顔日記	九日 十日 十一日	十二日 十三日 十四日	十五日 十六日 十七日	十八日 十九日 二十日
明石舟別れの段	竹太夫 陸路太夫 市之助 團伊三八 造友作	富太夫 辰太夫		
	琴市 松重次郎	猿若綱延		
宿屋より大井川の段	小春太夫 呂太夫 綱右衛門 重造	相生太夫 清二郎	南部太夫 寛市	
	琴友 花仙三郎	團二郎	綱治	
鎌倉三代記				
三浦之助母閑居の段	前南部太夫 寛市	町太夫 歌助	源路太夫 喜代之助	小春太夫 團二郎
	後呂太夫 友ヱ門	和泉太夫 友造	つばめ太夫 友ヱ門	相生太夫 友平
艶容女舞衣				

人形役割

明石舟別の段

宮城阿曾次郎　桐竹政龜
娘深雪　桐竹紋十郎
船頭　吉田玉昇

宿屋の段

駒澤治郎左衛門　桐竹政龜
岩城多喜太　吉田玉幸
下女お鍋　桐竹紋司
笹久藏　吉田玉德
娘深雪　桐竹紋十郎
戎屋徳右衛門　吉田小兵吉
奴關助　吉田玉市
川越大ぜい

三浦之助閑居の段

三浦之助母　吉田玉七
讃岐の局　桐竹紋太郎
阿波の局　吉田文作
女房おくる　桐竹政龜
嫁時姫　桐竹紋十郎
三浦之助義村　吉田玉松
富田六郎　吉田扇太郎
藤三郎實は佐々木高綱　吉田榮三

酒屋の段

つばめ太夫　芳之助
南部太夫　吉左
小春太夫　綱右衛門
呂太夫　重造

双蝶々曲輪日記

八幡の里引窓の段

富太夫　喜代之助
文太夫　叶太郎
辰太夫　稲丸
千駒太夫　八造
清二郎
相生太夫
つばめ太夫　芳之助
貴鳳太夫　友二
和泉太夫　友造

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

辨慶　おわさ　しのぶ　侍従太郎　花の井　郷の君
長尾太夫　文太夫　播路太夫　津の子太夫　津磨太夫　駒若太夫　歌助
相生太夫　小春太夫　竹太夫　さの太夫　佐久太夫　土佐子太夫　友平
呂太夫　南部太夫　むら太夫　叶美太夫　長太夫　越名太夫　吉左
つばめ太夫　源路太夫　陸路太夫　駒尾太夫　宮太夫　好太夫　友ヱ門

酒屋の段

酒屋半兵衛　桐竹門造
牛兵衛女房　吉田玉七
親宗岸　吉田玉次郎
嫁お園　吉田文五郎
娘おつう　吉田文枝
酒屋半七　吉田文作
美濃屋三勝　吉田光之助

引窓の段

濡髪長五郎　吉田玉松
南方十次兵衛　吉田榮三
女房お早　吉田文五郎
長五郎母　吉田小兵吉
平塚丹平　吉田玉市
三原傳造　吉田玉徳

辨慶上使の段

武藏坊辨慶　吉田玉幸
侍従太郎　桐竹門造
妻花ノ井　吉田光之助
腰元しのぶ　吉田榮三郎
女房おわさ　吉田扇太郎
郷の君　吉田文二郎
腰元　大ぜい

生寫朝顔話

明石の浦舟別れより宿屋、大井川まで

此の曲は山田案山子の戯號で近松德叟が熊澤蕃山の作と傳へられてゐる。『露の干ぬ間』なる朝顔の小唄を原に想を構え『生寫朝顔日記』と題して竹本重太夫のために書卸したのであつたが上演に致らずして文化七年八月病歿した。それを翌年近松柳が『德叟遺稿朝顔日記』として讀本に刊行したが非常に評判になつたので天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らはしい人が添作して、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、小瀬川、廓耶ケ獄、濱松、島田宿、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱の五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ『生寫朝顔日記』であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遺子鵜澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は緣起が悪いと云ふので、『增補生寫朝顔話』と七字に改題した。それ故に今日流布してゐる正本は此の嘉永三年刊行のものが多い。この曲の筋は、秋月弓之助と云ふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在住中、宇治の螢狩で宮城阿曾次郎と云ふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中に秋月一家は急に本國に引上ぐる事となり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で本意ない別れを惜む。その際深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日の筐に阿曾次郎の船に投入れて纜を解いた其後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門と改めて江戸へ出府する。一方歸國した深雪は男の事を忘れかれ本國を出奔して都へ上ると、男は去つたので、その行衛を追ふ中盲目となる駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、島田宿の戎屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する。後で知つた深雪は直ぐと其後を追つたが一足違ひで大井川は豪雨で川止となつたので、失望の結果入水して果てやうとした時、戎屋の亭主と下部の關助が駈けつけて助け、戎屋の亭主は深雪が祖父の家臣と云ふ事が解り、駒澤

が憑んだ眼藥は甲子生れの人間の生血で調劑すれば癒えると云ふので、甲子生れの亭主が切腹して。それが爲めに深雪の眼が開くと云ふ内容であります。

（床本）　明石浦船別れの段

和田海の涙の面てに月影も明石の浦の泊り船風待つ程のつれ〴〵を慰めかれて阿曾次郎舳先に立出月かげに四方を見晴らす氣ばらしの煙草の煙吹きなびく船路の旅ぞものさびし傍にかゝりし大船は秋月弓之助が歸國の乘船乘人も水夫も船草臥前後も知ぬ高鼾娘深雪は只一人目さへも合はぬ戀人を思ひこがれてうつうつと戀に心を筑紫琴せめて慰むよすがもとかきならしたる糸しらべ露のひぬ間の朝顏に照す日かげのつれなきにテ合點の行かぬアノ諷は過つる宇治の盤狩に秋月の娘深雪が扇に、某が書てあたへし朝顏の唱歌聲さへ深雪に生寫し、ハテいぶかしさよと見上ぐればあなたも見下す月かげに顏はまさしく深雪殿ではないか、ヤア阿曾次郎樣逢たかつたと我を忘れて乘移るを抱きとつて口に手を當てハテ聲が高い深雪殿恩ひもよらぬ今の對面何ゆへに此所に、さればいな宇治でお別れ申てよりも片時忘れず泣きくらす内國元に驅動起り父母共に俄の旅立所詮逢事叶はぬかと何ぼう悲しう思ふたに爰で逢たはつきせし緣ぞふぞ此身を何國へとつれて退いて賜はれとびつたりいだき月の夜の影も隔てぬ比翼鳥放れがたなき風情なり。阿曾次郎も心を察しチヽ嬉しいそなたの志忘れは置かぬさりながらそなたを今つれ退いては某が武士道立ず殊に此度伯父の賴みにて遁れぬ主用猶もつて女を同道しがたき入譯有緣ならば添時節も有ふ斯して居ては人のとがめサアちやつと元の船へ乘つてたもヱヽそりや聞へませぬ阿曾次郎樣添れる時節も有ふとは當座遁れの捨詞お氣に入ずば打明けて包まずそれと言つてたべもしもおまへにそふ事のならぬ時には淵川へ此身を投て死まする。ふたゝび外の夫迎へせぬを誓ひし身のけつばくさらばさ斗り水底へ既に飛込んと立上るを、あはて驚き抱き留、コレ待た早まるまいイエ〳〵放して殺して下さんせ、アヽ是非もなしそれ程

迄思ひ詰めた娘心、見殺しにマどふせられふ不義いたづらと世の人の口そしらばそしれつれて退くコレ盡未來迄女房ぞやエ、嬉しふござんす添いそんならねがひを叶へて下さんすかチ、武士の詞に二言はない去ながら此ま、につれて退ば親達のもしや海川へも身をなげたかとお歎きあらんは定の物委しい樣子をつい一筆。チ、よふいふてくださんしたわたくしもそふ思ふてゐますがどふぞ料紙をかして下さんせチ、心得しと懷紙腰をすぐつて南無三寶そなたを抱留る拍手海へ何やら落せし水音旅矢立をはめてのけたマ、どうしたらよからふぞチ、それなら待て下さんせ二親はじめ伴々まで旅草臥の寢入ばなそつと元船へいんで一筆書置してきませうチ、それよからふがコレかならず物音させて親達の目が覺めぬよふ心得ましたと立上れば阿曾次郎は肩車あなたの船へ乘うつらす音に目さます船頭共チ、地嵐が吹出した碇をあげよ帆を卷けと驅ぎ出せばなふ悲しやとあせる内船は次第にとふざかるコハなにとせんかとせんとあせるはづみに阿曾次郎が船へ投込扇のわかれ後しら涙を隔ての船つながぬ緣ぞ是非もなき。

（末本）

宿屋の段より大井川の段まで

何國にも、暫しは旅と綴りけん昔の人の筆の跡、徒然佗ぶる假の宿夜の襖の透洩りて、風に瞬く燈火の影も淋しき奥の間へ、立歸る治郎左衛門。何心なく座を占めて、不圖目に付く衝立の、張交の歌讀下し。詞テ心得ぬ、此の貼交ぜの地紙の歌は先年山城の宇治にて、秋月が娘深雪が扇に某が、又逢ふまでの筐にと、書いて與へし朝顏の歌。其後圖らず明石にて、船繫りせし其砌、琴に合はして深雪が節付け、折節思はぬ互の出船、飽かぬ別れを悲しみて、女の手づから、我船へ投込みし此扇。然るに今又此家にて、思はずも此張交ぜ、ア何者が諷ひ傳へて、はからず東の驛路に、見るも不思議と獨言其折からの忍ばれて、詠め入つたる時しも有れ、襖押開け德右衛門、小腰屈めて入り來れば、此方も扇押隱し。詞ヵ、亭主、先刻は扨々きつい働き、危き難を遁れしも、全く其方

が志、サヽ是へ〳〵。ハヽ冥加に餘る御言葉、エヽ最前此方へ參る砌何か三人密々話、合點行かずと怨び聞けば、痳痺藥を茶に交て、彼方樣へ差上げんゞの、アヽコリヤ、サアマ恐ろしい巧み、エヽ憎さも憎し、直に申上げうとは存じたれど、夫ではどの樣な科人が出來うも知れぬと存じ、ヘヽ幸ひ先日慰みに求めました笑ひ藥、ヤコレ幸ひと、痺れ藥と取替へたを、知らずに呑んだ先刻の時宜、此後とても且那樣、御油斷は成ませぬぞへ。ホヽ其儀は某も疾く承知致した、マ夫は格別、此衝立にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、何いふことから御身が手に入りしぞエヽ夫でございますか、其歌についてマ哀れな話。エヽ元は中國邊歷々の娘さうなが、何やら尋ねる人が有るとて、親元を家出し、夫より方々と流涙の上、果はさう〳〵目を泣潰し、跡の目までは濱松邊に、其歌を歌ふて袖乞ひ、所に又國元から、所緣の女子が尋ねて來て逢ひました、が其女も程無う病死、夫から又獨ぼし、此邊まで其歌を歌ふて歩きましたが、何が盲目でこそあれ、器量は良し、聲は良し見る程の者がいぢらしがり、朝顔々々と言ふて、其歌を知らぬ者はござりませぬ、私もあまりの不憫さに、此宿に足を止めさせ今では宿屋宿屋の御客の伽、何とまア不仕合せな者も有るものでござりますと、涙片手の物語も、心に痛々應ゆる駒澤、若し言交せし我妻かと轟く胸を押鎭め。詞ムヽ夫は扨哀れな話。身も今宵は何とやら物淋しい鬱散の爲其女を、呼寄する事はなるまいか。イヤモ何が扨て易い事、只今呼びに遣はしましよ、御慰みに琴か三味。ムヽ何分宜きに賴み入ると云ふは仔細の有るぞとも、知らぬ佛氣德右衛門、尻輕にこそ立つて行く跡へ相役岩代多喜太、のさ〳〵と座に直り。詞ヤア駒澤氏、嘸御退屈でござらう。コレハ〳〵岩代氏、殊の外お早い事でござると、上べは解けても解けやらぬ、前垂掛けの下女お鍋、次の間に手を仕へ。詞申し〳〵只今朝顔殿が見えました、是へ通しましよかいな。ナニ朝顔とはそりや何者だ。アイヤ、此道中で琴三味を彈き、旅の徒然を慰さむる瞽女とやら、拙者も何か物淋しうござれば、

ちと琴でも聞かふと存じ、亭主を頼み呼寄せましてござる。アイヤ夫や止めにされい。トハ又何故なぞ。サレバサ、先刻身共が知音たる萩野祐仙同席如何と云はれた貴殿、乞食をば座敷へは通されまいかい。ハテ高の知れた盲目女、萬更怪しい、ナソレ茶箱も持参致すまいと、しつべい返しにぎつくりと、言句に詰れば減ず口。詞アヽ左程御所望ならば兎も角、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出し、琴なと三味なと、彈かし召されて、早く此場を追返されよと、飽まで意地持つ執拗者、寄らず障らず駒澤が。差圖にお鍋は心得て。詞朝顔殿召しまする、朝顔殿々々々と呼出つる。むざんなるかな秋月の、娘深雪は身に積る、歎きの敷の重りて、塒失ふ目無鳥、杖柱とも頼みてし淺香は脆く朝顔と、消殘りたる身一つを、遺に捨ても緣先の、飛石探る足元も、危なき木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、漸々座して手を仕へ。詞召しましたは此お座敷でございますか、拙い調も御笑ひ種、おはもじ樣やと會釋する、顔も深雪の成れの果、不愍の者やと急り來る、涙呑込みひかへ居る。岩代は夫とも知らず。詞ヤア見苦しい其形で、我々が目通りへうせたは、ムヽ聞及んだ朝顔めな、エヽきり〳〵立つて失せ居らう。アイヤ〳〵岩代氏、さうもぎどうに仰せられな、此方に呼寄せたればこそ、思ひ掛けのう、アイヤ思ひ掛け無う來た者を、叱るは武士の情に非ず、ロリヤ〳〵女、大儀なが

ら其朝顔とやらの歌、サヽ早う歌ふて聞かせいと、望む心は千萬無量、知らぬ岩代頻腹し。詞扨々駒澤氏には、イヤモ強い御熱心だはい。コリヤ〳〵盲女、何なりとも、エヽ歌へ〳〵、サヽ早く〳〵。ハイ〳〵ハイ歌ひまするでございますと、焦るゝ夫の在るぞとも、知らぬ盲の探り手に、戀故心盡し琴。誰かは憂きを斗爲吟の、絲より細き指先に、指爪さへも八ツ橋の、蜜れ果てたる身を喞ち、涙に蛍る爪調べ。ウタ露の干ぬ間の朝顔を、合照す日かげの難面きに、合哀れ一むら雨の、はら〳〵と降れかし。詞ムヽ夫を慕ふ音律の、我々が身にも思ひ遣られて、思はず感涙致した、のう岩代殿。如何樣、琴と謂ひ器量と謂ひ、イヤモ中〳〵

感心仕る、てイヤナニ朝顔さやらそこは定めて冷えるであらう、身どもが傍で今一曲、サア〳〵所望だ〳〵、アーイヤ〳〵岩代殿、最う許して御遣りなされい。去ては駒澤氏、身共が望みを止めさつしやるはソリヤ意地の惡いと申すもの。イヤさうではござられど、彼女も定めて疲れませうと存じて。ハーアヤ然らば曲は止めにして、コリヤ〳〵女、汝もはらからの非人でもあるまい。身の上話も亦一興話して聞かせヨ如何だい〳〵。ハイ〳〵能う問うて下さります、お言葉にあまへお話し申すも恥しながら、元私は中國生れ樣子あつて上方住居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよるべの螢狩に思ひそめたる戀人と語らふ間さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ國の迎ひ。詞親々に誘はれ涙花の浦を船出して、身を盡したる憂思ひ、泣いて明石の風待に、偶々逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹分けられ、國に歸れば父母の、詞思ひも寄らぬ夫定め、立ろ操を破らじと、屋敷を拔けて數々の、憂目を凌ぎ都路へ、上つて聞けば其人は東の旅と聞く悲しさ、又も都を迷ひ出で、何時かは巡り逢坂の、關路をあさに近江路や、美濃尾張さへ定めなく、戀し〳〵に目を泣き潰し、物の文色も水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、何の世如何なる報にて、重々の歎きの數、憐れみ給へとばかりにて、聲を忍びて歎きける。詞テ扨哀れな話、併し男日旱も無い世界に、マ氣の狹い女だな、イヤもうしゆんだ話で氣が滅入つた、寢酒でも食べ氣を晴さう、イヤナニ女、暇を吳る立歸れ。ハイ〳〵有難うございます左樣なれば御客樣、最う御暇申します。オー朝顔さやら大儀であつた、初めて聞いた身の上話、若し其夫が聞くならば、嘸滿足に思ふで有ろ。ノウ岩代殿。左樣々々。ハーア是はマア御親切なお言葉、有難う存じますと、杖探り取り立ちながら、虫が知らすか何さやら、耳に殘りし情の詞、名殘惜しさに泣く〳〵も、心はあとに探り行く。折節奥より若侍詞最早餘程深更に及び候、御兩所ともに早やお休み。如何樣、明日は正七ツの出立、イザ駒澤氏お休みなさ

れぬか。イヤ拙者は今暫し用事もござされば、御構ひなく御先へ。左樣なれば御先へ臥せらう、ドリヤムヽヽヤ御免下されと、立上りしが、胸に一物、心をあとに奥の間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遲しと駒澤手を鳴らして女を呼び。詞アヽコリヤ〳〵德右衛門に急々對面したし、呼んでくりやれと云ひ付けやり。旅硯の墨摺流し、以前の扇開いて、何か書付け用意の金子、藥の包。取認める目の先へ疊を貫く白刄の切先、氣轉の駒澤有合ぬく刀にそゝけば下には血汐と心得てしてやつたりと疊刎上現れ出る笹久藏、駒澤覺悟と切付る、刄を恐れぬきせるのあしらひ廊下傳ひに來かゝる亭主コハ何事と窺ふ内苦もなく刀打落し後なり切るなりとたんの拍子首は遙に飛散つたり。ヤレ適れお手の内アヽコリヤムハヽヽヽヤ出來ましたイヤ申旦那樣一体此奴は何者でござります、ホヽウ某を欺討にせんと飛で火に入る夏の虫ハヽヽ死骸はよきに賴み入。ハヽお氣遣なされますな。シテ只今召しましたは何の御用で御座りますオヽ德右衛門、折入つて賴み度きは先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼び寄せて給るまいか。ハイ畏まりましてござりますが、彼女は直ぐに清水と申す方へ參りました、御用事ならば呼びには遣はしませうが。マヽどうで今夜のお間には。ムヽハテ殘念至極身は正七ツの出立、マ能々緣の。エヽ何んと御意なされます。アイヤナニ德右衛門、今の女に謝禮の爲。此三品を其方に確りと預け置く間、朝顔が參らば渡して吳りやれ。ハイ〳〵、オヽコリヤマア、夥しいお金其上結構な女扇、お藥までも。オヽサ、其藥は大明國秘法の目藥、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、如何なる眼病も即座に平癒、朝顔に渡して吳りやれ。コレハ〳〵何から何まで、お心を籠められた下され物、參り次第相渡し、ハイエヘヽヽ悦ばしますのでござりましよと、受取る折しも時計の七ツ詞ムヽアリヤ最う七ツの刻限と、數ふる内に岩代多喜太、裝束改め旅出立、同勢引連れ立出でゝ。詞イザ駒澤氏、出立仕らうと、勸むる言葉に治郎左衛門、衣紋繕ひ立出づれば、見送る亭主が暇乞ひ、心そぐは

ぬ駒澤岩代、打連れてこそ出でゝ行く。跡見送って德右衛門。詞ハ〜同じ侍でも黒白の違ひ、意地くれ悪い岩代に引替へ、情深い駒澤殿、アゝ天晴れの侍じやなヤ。夫はさうと、朝顔に、今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ樣子の有りそな事と、思案の折から、深雪は何か氣に掛り、座敷しまふてうと〳〵と、又立返る切戸の内。德右衛門目早に見て。詞オゝ朝顔か、遲かつた。脊の御客樣が最う一度呼びに遣つてくれいと仰しやつたれど、清水へ往つたと聞いた故、お斷り申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悦びや、大枚のお金と扇、又結構な目藥、我身に遣つて呉れいと、コレお預けなされたわいの。是はマアく冥加に餘る事、ハお禮申さいで殘り多いが、申し申し旦那樣、此扇は何ぞ書いてはござりませぬか、はゞかりながらちつと見て下さりませ。オゝドレく、エヽ、金地に一輪朝顔ア露の干ぬ間が書いてあるゾヤ、裏に宮城阿曾次郎事駒澤治郎左衛門と書いてあるぞや。エヽ、アノ宮城阿曾次郎事、駒澤治郎左衛門と其扇にオイノ。エヽハヽアはつとばかりに俄の仰天。詞知らなんだ、知らなんだ、知らなんだわいな、道理で能う似た聲と思ふたが、そんなら矢つ張阿曾次郎樣で有つたかいの、申し申し旦那樣、其お客樣は何時お立ちなされたへ、オヽ今の先の事じやが、我身は又お馴染か。馴染所か、年月尋ぬる夫でござんするわいな、斯う云ふ内も心が急ぐ、追付いて只つた一言。と、行かんとするを引止め。詞アゝコレく〳〵コレマアく〳〵待ちやく〳〵、エヽ折悪う雨も降出し、此暗いに一人は危いく〳〵。イエく〳〵イエ假令死んでも厭ひはせぬ。ササヽヽ夫はさうでも盲の身で危いく〳〵。イヤく〳〵放して〳〵と、突退け刎退け杖を力に降る雨も、合いつかな厭はぬ女の念力、跡を慕ふて。三重追ふて行く。名に高き、街道一の大井川篠を亂して降るあめに、打交り鳴るはたゝ神、漲り落つる水音は、物凄くも又すさまじき、夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪が倒つ轉びつ、漸々爰に川の傍。詞ノウ川越達、駒澤治郎左衛門樣と云ふ御侍、最う川をお越しなされたか

未か、聞かして〳〵と、云ふ聞さへも息切れの、聲に川越口々に。詞すゝ其侍は今の先渡つたも、俄の大水で川は止つた、笑止笑止とばかりにて、皆散々に行過ぐる。詞ナアナニ川が止つた。ハゝア、悲しやと張詰めし、力も落ちて伏轉び　前後不覺に泣きけるが、又起き上がつて見えぬ目に、空を睨んで。詞天道樣、エゝ聞ゐませぬ〳〵わいなっ此年月の艱難辛苦も、何卒最一度其人に、逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とては無い者を、今日に限つて此大雨、川止とは〳〵、エゝ何事ぞいの、思へば此身は先の世で、如何なる事の罪せしぞ、扨も扨も味氣無や焦れ〳〵た其人に、逢ふても知らぬ盲目の、此目に如何なる惡業ぞや。夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦潟、巾領振山の悲しみも、身に比べては數ならず、三千世界を尋れてもこんな因果が又と世に、有るべきかはと口說き立て、拳を握り身を震はし、流涕焦れ歎きしは、餘所の見る目も哀れなり。ヤゝ有つて起直り。詞ガゝさうじや〳〵、とても添はれぬ身の因業、此川水の增さりしは、所詮死れとの事なるべし、未來で添ふを樂に、爰を三途の川と定め、弘誓の船に法の道、急がん物と泣く泣くも、合夫を戀し小石の數、袖や袂に拾ひ込み、南無阿彌陀佛の聲諸共既に飛ばんず其所へ。ヤレお待ちなされ深雪樣と、聲にびつくりけしとむ內。駈け來る關助、德右衞門、斯御待ちなされませ。イヤ〳〵誰かは知られど、放して〳〵。マア〳〵待つしやれ朝顏殿、コレ關助殿とやらが見えたぞや。ハゝア下郎めでござります、まづ〴〵氣をお靜めなされませと、無理に手を取り抱退くれば詞ムゝさう云ふ聲は關助か。遲かつた〳〵わいの、此年月艱難して尋れ焦れた阿曾次郎樣に、折角逢ふたに盲の悲しさ、夫とも知らず別れたれど、何うやらお聲が氣に掛り、戻つて聞けばやつぱり其人、おのれやれ付追かふと、跡追ふて來れば此川留、關助如何せうぞいのう〳〵〳〵。ガゝお道理だ〳〵〳〵、御尤で御座居ます、何が拙者めも貴女樣の御行衞を尋れ廻る內、一昨日の夜の夢に淺香殿に逢ひ、即ち貴女樣は

島田の宿、戎屋德右衛門方にござると、云はしやると思へば目が覺め、シヤ何でも不思議と、夜を日に繼いで參つた甲斐有つて、既ての事に危い所を、ヤレ〳〵嬉しや〳〵〳〵なハ、ゝ、イヤモ下郎めがお目に掛る上は、お氣遣ひなされますな、駒澤樣にお添はせ申す、併し淺香殿は、坂東順禮となつて、東海道へ尋れて見える筈、がお逢ひなされましたかな。サレバイノ其淺香に跡の月、濱松で廻り逢ふたが、其夜惡者に出逢ひ、數ケ所の手疵、死ぬる今端に私を呼び、中山の邊には私が生みの親古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守り刀を證據に尋れ行き、秋月弓之助が娘と名乘つて、逢へと云ふ敎へ、可哀や終に死にやつたわいの。ムゝスリヤ淺香殿には最後とや。ホイ、はつとばかり驚く内、始終聞き居る德右衛門。詞ムゝそんなら御前は、秋月弓之助樣の御息女樣、又淺香と云ふは我娘であつたか、ムンと心に點き件の短刀拔手も見せず、腹へぐつと突立れば、コハ何事と驚く兩人。おゝ御不審は尤だが、先づ〳〵一通り聞てたべ、ハ〳〵私事は其お尋ねなさるゝ、古部三郎兵衛と申す者、即ち貴女樣の祖父、秋月兵部樣には三代相恩、若氣の誤り、奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助樣に助けられ、女諸共國を立退き産落せしは女の子、貧苦の中に育つる中、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へ此短刀を添へて養子に遣りしが、廻り〳〵て思はずも、親が命を助けられし、秋月樣へ御奉公、死んでも忠義を忘れず、この親を導きをつたかゞ、出かしたな、又最前駒澤樣の仰には、唐土傳來の目藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、如何なる眼病も、即座に平癒との事、則某甲子の生れなれば、我血沙を以て件の藥に調合し、早く彼方へ、サゝ早く〳〵、實にもと關助用意の水呑取出だし、手負の血沙受留め〳〵。泣入る深雪が懷の、妙藥取出し差寄すれば。深雪受取り、我夫の情に餘る賜物と、押戴き〳〵、只一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、あり〳〵傍りの見え透くにぞ、深雪が嬉しさ關助も、悅び合ふぞ道理なる。詞アゝ嬉しや、最早此世に望み

なし、何れも去らば去らばと刀引廻し、笛の緒を刎切つて、名のみ流るゝ大井川、水の泡とぞなりにける。跡や骸に取り縋り、わつとばかりに泣く涙、露の干ぬ間の朝顔も、合開きし此目は盲龜の浮木優曇華の、花に勝りし夫の賜物、二つには我故此世に亡き人かと、取りつき歎く後より思いがけなく萩野祐仙、深雪やらぬと取付た、首筋摑んでかつぎ上、川へざんぶと水けむり。早や明渡る鶏の聲、山田の惠み彌勝り、茂れる朝顔物語、末の世までも著るし。

鎌倉三代記

三浦別れの段

天明元年三月二十七日江戸肥前座書下しが初演らしく作者は未詳「近江源氏先陣館」の續篇とも見るべき作大阪夏の陣を題材に世界を鎌倉時代に取つたもので坂本城は大阪城、石山の陣は茶臼山の本陣、鎌倉に江戸を當て、人物は北條時政は德川家康源頼家は豊臣秀頼、佐々木高綱は眞田幸村、三浦之助義村は木村重成である。此段は北條時政の女にて坂本城の勇士三浦之助義村と許嫁の間柄である時姫を戀と孝との間に挾まれて苦悶する悲劇の主人公として脚色したる點が主想で、例の佐々木の代り首が出て來たり、三浦之助の母の節婦振り、時姫三浦之助との濃やかな愛情の華、藤三郎に化けた佐々木の豪放智勇の武士道を配して大阪夏の陣を色こく出してゐる名作。

（床本）三浦之助母閑居の段（前）

入相過されば風雅の歌人は戀とや聞かん虫の音も澤の蛙の聲々も修羅の街の戰ひと身に引しむる兜の緒若宮口の戰場より一文字に取て返す心は更に後れねどもし落人と人や三浦が孝行の念力通ず母の軒端しや爰ぞと氣は張弓始めてがつくり門口にかつぱと轉ぶ物音は胸にこたゆる二世の緣心とき姫走り出、見給ふかたなき武者ぶりのヤア三浦樣かとかけよつて抱おこさんも大男、コレ時姫でござんすと云へ共正氣あゝ悲しや詮方泣間も有あはす幸び氣付の獨參湯そゝぎかけたる藥水の一滴五臟にしみわたりむつくと起て母人は何國にチゝお氣が付いたかなつかしやと鎧ひしとすがり付ムゝ思ひよらぬ時姫殿こゝへはどふして間ふ間も惜しや母人に對面せんと行を引とめ時姫殿とは聞へませぬ何ぼお嫌いなされてもわたしはお前の女房じや夫のかはりに母樣の介抱に來たが何の不思議ムゝすりや此程より付添居るか、シテ母人の御機嫌は今すや〳〵と御寢なつてお食はどふじやアイ何さし上てもいやとおつしやる、けさは漸々粥の湯を少しばかりハア聞しに違はずそれでは御本腹覺付ない、サアされ共お氣の御實正なは獨參やらの力

くすりの驗はまのあたり、今お前のお氣の付たも扨は母に與ふる藥で精心すゞしくなつたるも思はず知らず親の慈悲ハア勿体なし〳〵お休みならばお寢顔なりと拜まんと母も我身も是ぞ此一世の別れと思ふにぞ遺の勇氣も恩愛の肉身わけしばら〳〵と先き立つ涙案内にて物音響かば驚き賜はん靜に〳〵と心鎭めて病所の口立寄れば母の聲嫁女〳〵ヲヽ嬉しやお目が覺ましたか三浦樣がお歸りぞや義村參上仕るつると開くる隔てをはたとさしヤレ此障子あけまい〳〵そも三浦が歸りしとは坂本の城へ歸りしか、よもこゝへ來る三浦ではあるまい必ず麁相な事いふまいぞコレ嫁女マよふ聞きや、夫平六兵衛殿は先君の御家人後家の身となり幼少の三浦を育てくらすうち、宇治樣より達ての御所望頼家公の近習となし今より二代の忠臣とのお詞が有難さに坂本の城中へ御奉公にまゐらす時わらはも俱にとありつれ共イヤ〳〵せがれ三浦は人にすぐれて孝行ふかき者なれば母が傍に付添はゞまさかの時に親に引かされ未練の心付く時は却て親子が弓箭の名折れと思ま〻古郷に引のこり別るゝ時もくれ〳〵と必ず〳〵親あると思ふなよ母が事は忘れてもお主に忠義を忘るゝな煩ふ共死る共知らせもせぬぞ便りもすなと言聞かした教訓をよもや忘れふやうがないそれにうか〳〵戻つてくる三浦ではない、そりや人違ひ、かもし又來たが定なれば京鎌倉兩家分け目の大事の軍、戰場に向ひながら、さす敵に後を見せる狼狽た性根ならば子では無いぞサ親でない母は病ひに臥ながら日毎に人の取沙汰を余の名はきかず我子はいかに三浦は手柄仕たるかと佛神に祈誓をかけおのれやれ早ふ死で未來の夫に我子の自慢せんものさいまはの樂み心の嬉しさ其未練なせがれが有樣何と夫に咄されふ、最早や此世で顔合はす子は持たぬぞ此蚊帳の中は母の城廓、其おくれた魂で此城一重やぶらるゝなら破つて見よと、百筋千筋の理をこめて引つかづいたる蚊帳の中泣音よりほかいらへなし、母の教訓肝にめいじ、其お詞忘れねばこそ、古郷を出て今日まで一度便りも致され共お命も危ふしとの噂さを聞たに胸せまり、今生で御無事な御顔をたつた一

目拜みたさに眼くらんで侍の道を忘れし不調法御病氣のお氣を揉す不孝を御免下されかしイデ戰場へかけ向ひ花々しき高名して追付凱陣仕らん其時目出度御對面お暇申すと立出る、時姫あはて抱き留め、のふコレ待て下さんせ、折角顔見た甲斐もなふ最ふ別かるゝとは曲もない親に春いてこがれた殿御、夫婦のかためない中はごふやらつんと心が濟まぬ短い夏の一夜さに忠義のかくる事もあるまい是程までに付したふわたしが心思ひやつてくれもせで心强やと緋縅にうら紫の色深きチヽ切なる心は察したれ共出陣は延されず夫婦となるは凱陣の後、暫しの間だと相待たれよ、イエ〳〵それでもハテ聞きわけなし放されよと振切り〳〵かけ出すを又抱留めて三浦様、追付凱陣とは偽りお前は今宵討死に行かしやんすので有ふがなといふ聲高しと口に手を覆へどさまらぬ涙聲、イヤ〳〵〳〵是が泣かずに居られふか討死の門出には忍びの緒を切るときく殊更兜に名香の香るはかれての御物語り思ひ切つた最期のお覺悟、私もお前に連添ふからは何の未練にとめやせぬ〳〵なぜあからさまに打明けて此世の縁は是限り未來で夫婦に成つてやると一言いふては下さんせぬやつぱり敵きの娘じやと疑ふてかいの聞へませぬ父上の事は打忘れ日本國に親といふは奥にござる母様よりほかにはないとおもふて居るに、あんまり氣强い三浦様、お前を先立てあとにのめ〳〵生て居る時姫じやと思ふてかいのと身をふるはし積り〳〵しうさつちさ鎧の膝に夕立の涙汲出す如くなり、チヽよい推量いか程深切をつくしても三浦が疑ひは晴ぬはい、アまだ私に疑ひがチヽ晴ぬ仔細言聞かせんがそれも益なし、もふさらばイヽエ待たしやんせ、イヤサ放せイヤなふ長ふ止はせぬはいのどの樣に思ふてもアノおやつれなされやう、もふ母様はけふあすのお命何んぼ潔ふおつしやつても討死と聞き賜はゞお歎きが思ひやらるゝ今宵一夜は夜伽遊ばし同じ事なら御臨終の後で死で下さんせといふも泣々義村も父母に請たる身体肩脇死に目にあはで別かるゝかと行きつ戻りつとつむいつ又もや咳の聲すれば是こそ聲の聞き納めと思へばよはるうし

ろ髪、せめて暫しは餘所ながら萬分一の恩報じ御藥りなりと溫めんと心の内にくる珠數の涙しのびのおのづからみじかよ。

（床本）三浦之助母閑居の段（後）

既にふけ渡る丑滿告ぐる夜嵐の闇を伺ひ立戻る二人の局銘々一腰脇挾み見やる傍への薄原、井筒のかはにかぎ繩引つかけ下より傳ひかけ上るはヤア富田の六郎殿シイ高い〳〵姫を奪ひ返す事藤三めに仰せ付られたれど心元なく横目の使ひ時政公の御差圖兼て覺へし忍びの術、小松道より半丁ばかり此井筒まで切拔かせ忍び入たる術の手つがひ、三浦が爰へ來りしは鰯網で鯨の大功、御身達は宿はづれの出口〳〵に番の付け姫の安否を相待たれよ合點〳〵とうなづき合、後ろに立聞く隣のおくる、人こそ來れ何者と咎むる中にも透さぬ身がまへ〳〵聊示なされなお味方の者ム〳〵味方とは傍輩の女中かおすへかな名は何と、イヤ私はけふの役目を蒙むる安達藤三が女房夫に力をつけん爲め得よりこゝへ忍びの女、勝手覺へし裏口四方コレ御案内申しましよム〳〵〳〵出かした〳〵幸究竟コレ〳〵局、我に任して、かう〳〵といふもひそ〳〵別かるゝ局、おくるが案内に富田の六郎裏口さして忍び入かくと白齒を染兼る思ひに迷ふ時も時、姫に見入つた藤三郎尻付小馬の細目してお姫樣何と其守刀慥な證據でござりませうか、それをしるしに北條樣からお迎ひに來た藤三郎サアござりませと手を取れば振放し三浦之助義村が妻の時姫、醫へ父上でも敵味方、敵の家へ何の歸らう迎ひの人もあるべきに名も知れぬ新參者返事に及ばぬ歸れ〳〵申しそれや惡い思ひ付じやぞへ鎌倉方の御評定には坂本の城は追付落る、お前の大切に思はしやります三浦殿はけふ明日の中ち首がころり其手はづちやんとしてある、何ぼ可愛がらしやつても首のない男に心中立るはあとの月の富の札を買やうなものじやぞへ、そんなあぶないものより男に持て何不足のない藤三郎時姫を取返して戻つたら其褒美には汝が女房につかはす間た心のまゝに抱て寢てたのしむべしとの御上意爺御にきつと約束して來たからは殿御といふはコレ此藤三

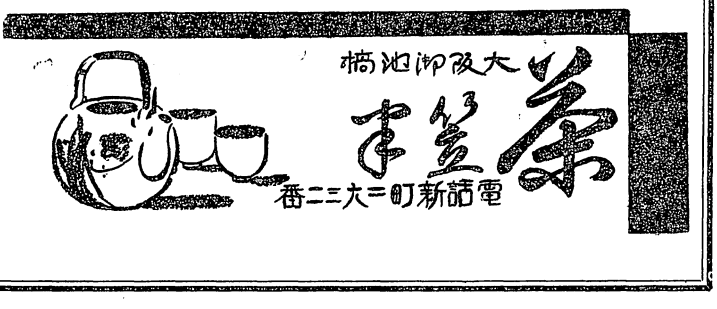
お前への心中に顔に入ふくろして來たはいなアイヤ又美しいものでもあるいやでも應でもかたげてのくサア〳〵〳〵お出と付まとふ、寄な〳〵推參者主人に對して慮外の科時姫が手討にするぞ、エヽイ叔はお前は首のない男が好じやな、いかに下が肝心じやとて胴ばかりを抱て寢やうとは胴慾な御心底、御免〳〵と言はせも立てず隱せし刄にわつとばかりあたまかゝへて逃て行く、時姫せきくる涙ながら父のしるしの封劔を打守り〳〵エヽ聞へぬ父上、此刀をたまはりしは三浦樣と緣切の印しに母さまを殺して歸れとある難題は刄の色に現はれて胸を切りさく御賜物尤も親のゆるさぬ夫思ひ初た不義の科お憎しみあるならばお手討に遊ばす共恨みとは存じませぬ夫を捨てゝ歸れとはお情けに似て情ないいたづら者の成敗にあの下主下郎の妻となし世上へ恥を見せしめとは餘りむごい御仕置とてもつながる緣じやもの夫と一所に自害せいとおつしやつて下さらばそれこそ誠の親の慈悲恨めしい父上さまあすを限りの夫の命疑はれても添はれいでも思ひ極めた夫は一人あの世の緣を三浦樣必ずやいのとばかりにて既に自害と三浦之助しつかと押へヤレ早まるまい只今の一言にて日頃の疑ひ晴れたるぞスリヤ眞實親達も夫には見かへぬなホウ神妙〳〵コレ時姫今死る命をながらへ三浦が最期を見屆けた上夫の敵き討つ氣はないか、ムヽ敵きを討てとはそれや誰をおゝほかまでもなく鎌倉の大將北條時政エヽイ驚くは理り誠三浦が女房ならば夫が賴む一大事滯脊はあらじ去年來佐々木高綱時節考へ付けねらへ共中々討つ事あたはざる武運强き北條殿佐々木が力に叶はれば此討人は日本に御身ならで外になし、迎ひの來るは究竟の時姫招きに應じてたち歸り父に近付油斷を見て一刀直に其太刀我咽喉に差貫いて自害せば是親を討つにあらず時有つて親子主從さし違ゆるも武門のつれ賴むといふは是一つ、とく心なれば未來はおろか五百生まで誠の夫婦いやなれば此座切り、親に付くか夫に付くか落付道はたつた二つサア返答いかに思案いかに、とせりかけられ、どちらが重い輕い共恩と戀との義理詰に詞は涙諸共に思ひ切てうち

ませふ北條時政討て見せふ、と〻様勝れたる威風備はり見へにける眞中
赦して下さりませ、とわつと叫べはにどつかと座し時姫の不審尤もあれ
チ〻出かされり遊れと天にも上るいに居るおくるが夫藤三郎といひしは
さみの顔色おもひがけなき小影より面体我に見まがふばかり似たるを幸
窺ふおくるつ〻と聞く人なしと思ひ價をくれて命を買取り去年石山の
ふは不覺最前よりの一大事殘らず聞陣にて北條家を欺むきし佐々木が饗
いた時姫殿覺悟召されと言ひ捨て〻首こそ彼藤三郎、僅かの恩に不便の
行くを透さず三浦之助小腕取つて引最期女が心思ひやる、龍は時を得て
敷けばコレ〳〵〳〵六郎様爰構はず天地に幡る時を失へば守宮蚯蚓と
と工みの次第を北條様へ御注進心得身を潜む、我君の爲に軍慮をめぐら
こなたに富田の六郎井筒のもとによし肺肝を碎くといへども頼家公の武
るかと見へしが下より突出す槍先に運拙なさ、なす事する事一つもなら
虚空を摑んで息絶えたり三浦之助聲ず、此度の合戰は坂本城滅亡の時、
をかけ兼て申合せし斗略今日只今と天より亡ぼす主人の運命へエ〻無念
〻なふたり、佐々木四郎左衛門高綱の籌慎止む事なくもはや斗略の術つ
殿いざこなたへと請ずれば井戸より きはてたるせんのつまり、百斗の中
ぬつと藤三郎始めにかはる優美の眼のたつだ一斗、おくるに得と申しふ
中おくるもしさつて式墨に千萬人に くめ死したる藤三が名をかつて、産
の土民に拵らへ濟し指にも足らぬ端武者共に安々と生捕られ時政の前に引出されしは地獄の上の一足飛未だ天道捨賜はざる印しにやさしも明察の北條殿正夫下郎に相違あらじとコレ此つらに入れ墨をさゝれし時の其嬉しさ此印しある時ははくちうに往來する共佐々木とさがむる者もなし我命だにあるならば時節を待て再び京都の旗下にひるがへさんと心の笑折節姫を迎ひの使者言い付けられしはハ〻アこれ幸ひ百萬の大軍より討取がたき一人を討つ謀りごとは姫にありと密かに三浦へ内通ししめし合はせし斗略はづれず姫の心底極まる上は大願成就時來れりハ〻ハア〻〻嬉し〳〵悦こばしといさめる面色威あつて猛く實に名にしあふ坂本

の惣大將と類ひなきおくるも末座に顔をあげ私しが夫は水呑百姓かづ〳〵の業藝さへ長の病氣の貧苦のうち、不相應な御臣の お貢、金銀に命は賣られど夫ももとは侍の端くれ生れついて憶病で弓引く事も叶はぬ非力、我身を悔む此年來、誰あらふ佐々木さまに面ざし似たが仕合せで討ち死の數に入るは一生の本望とにこ〳〵笑ふて行かれた顔今見る樣に思はれてあなたのお顔を見るにつけ思ひ出されてなつかしうござりますること言ひさしてひれ伏す疊の目に涙人の歎きも身にこたへいづれを見ても義理故に死なればならぬ定りか、開く御運が定ならば討死を思ひ止つてたべ三浦樣とくどき歎けば愚かな〳〵生はかたく死は安く生のこつて大事をはかるは佐々木殿程の器量なくては思ひもよらず、三浦などが及ぶべきか、一たん思ひ極めし討死再び返さぬ姿を見よと明ける鎧の引合はせ肌着は染まる紅ひに雪かくまどる數ケ所の矢疵、姫は悲しさやるかたなく討死の氣は付きながら弓矢の家に生れし身が是程の手を負たまふと知らぬ女の淺ましさと縋るを拂ひ〳〵おくる奥へまゐつて母人の介抱たのむ早く〳〵イヤノウ佐々木殿若宮口の合戰事急に及び必死の戰場切死と極めし所に貴殿より過急の早打此諺の成就を見屆けずして死ぬるは不忠一つには母に今一度忠孝二つに命を延べ血汐を隱す着がへの鎧、故郷に歸る心の錦とはしらずして敵方に後を見せしとあざけられん事末代までの武門の疵へエ思へば無念口惜し、此上の願ひには是より又も若宮の森に向ひ一身五体ずだ〳〵になるまで切つて切り死はかりごとの先途さ見ず相果てるも武士の意地眞平御免下さるべしと思ひ込だるはら〳〵涙、チチウ尤も至極高綱も心底推察仕る、エヽ惜むらくは今少し此はかりごと早かりせばあつたら勇士をやみ〳〵と討死はさせまい物、殘念さよさりながら犬死さばし思はれな、京都の武士に時政の眞實面体見覺へしは御邊一人三浦が首を討取つて實檢に入るならば、彌々我れに心をゆるし近寄るてだての一つならん、時には御邊の首を以て敵きの大將討ち取らば最期の大功忠義の第一われはもとより敵きに入り心は佐々

木面は此まゝ藤三郎、三浦が首は安達藤三が討とるぞ、ハヽア忝けし、喜はしや、最期の本望此上なし冥途で再會〳〵と互ひにつこと顔見合はせ笑ふぞ武士の涙なる涙の中に時姫は心を定めチゝそれよ親を捨て命を捨て主に從ふは弓取のみち、夫に從ふは女の操　不孝の罰のあたらばあたれ、夫故には幾ならくの責苦をうく共いとふまじ父の陣所に立歸り仕おうせて、お目にかけふ、一念通るか通らぬか、女の切先試みんと椽の鉢石心の目當突出す鎗を障子ごしじつかと取つて念力見へたまつこの通り仕おうせよと脇腹ぐつと貫ぬいたり、ノウ母様勿体なやコハ何故と三浦がおどろきおくるもあばて立つ居つ血どめよ氣付けと立寄ぐアヽ何におどろく事がある、定業極まつた死病ひ人參の精力で死兼る此母が苦痛を助けるとゞめの鎗、女でこそあれ侍の母、疊の上の病死せふより我子と俱に討死と思へば此切先は、名醫の鍼、ノウ嫁女是が勿体なふては仕おうせる事心元ない、生の親御を振捨て何の恩もない姑めを誠の母と此程の起臥介抱、心づかひ深切共過分ともどふも禮の言ひ様がなさ、こなたに功が立てさしたさ、三浦が母をしめたれば生の父北條殿へ孝行の一つは立つ、又此母への返禮にはこの通りの功を立て下され、親を忘れて義を立つる手本の鎗先きチゝあつばれ手の内けなげの働き、出かした嫁女出かしやつた三浦之助、十人にも百人にも又とあるまい忠臣を子に持つて死るおれは仕合せ者果報者とても果報のある事なら女夫此世で末長ふ、孫よろこぶを冥途から見るなら何ぼう嬉しかろ、御運開くる時あらば三ケ國四ケ國の主じとなしても惜しからぬ若武者を此儘むざ〳〵戰場の土となすかと手を取て見かは す顔に義村も三歳五歳の其昔御膝にいだかれし乳房の惠みに人となり恩を報ずる間もなくお傍を放れて幾年月、御なつかしさはいかばかり、只今母の胎内に立歸つたる心地ぞとひざにひつしと抱き付大聲あげて男泣敵の娘と思し召御憎しみも引かへて重ね〳〵の御慈悲心、御恩をいかで忘ずるべき、せめて半年添もせで思へば短い親子の緣コレのふ長い別れじやないわいの、最期所はかばる共

我子も嫁も翌は一所に死出の露、蓮のうてなで祝言の酌人は此母嫁入のこしを未來で待て居るはいの、コレ〳〵かならず早ふ迫付けあとからまいりますと、三人顔を見合せて、一度にわつと叫びなき是ぞ此世の名殘なる佐々木も悲歎にくれ居しが四方をきつと打ながめ既に四更も過たれば東の陽氣は是鷄鳴南北西に人氣立つはハレ怪しや東國の軍勢坂本の城間近く寄ると覺へたり、歎きをとゞめ出陣の用意あれと言渡し庭の井筒をしつかと踏へ古木の松が枝むさゝびの木傳ふ如くかけ上りハア〜寄せたり〳〵東は志賀越へ唐崎口、伊達の一黨奥州勢、勢田ケ崎まで滿々たり南は横川比良の口、大將の族眞先きに坂本さしてひた寄せに北は丹波路龜山街道西は京道淀八幡皆人ならぬ所もなし、日本一度に寄せる共恐るゝ敵は只一人勝負の一擧はあすにありヤア〳〵三浦醫へ心は剛なるとも深手に弱はり働き得じ後詰の副將城中より加勢を乞はんはいかに〳〵コハ佐々木殿共覺へぬ一言必死と定る三浦之助ケ程の手疵を何くつたくチー萬夫不當の大丈夫早や打立たんと高綱が勵ます勇聲せき立若武者暫くのふと時姫がとゞむる鎧振切る振袖是なふ今が御臨終名殘りに一ト目と言ふ聲に思はず後へ振りかへる緣の切目は蘭奢の薫り無常の聲や鯨の波後に見捨てゝ出て行く。



艶容女舞衣

酒屋の段

今ごろは半七さんのさはりで知られてゐる世話物の粋であります。上中下三卷からなつてゐますが酒屋は下の卷の上堺町の段の切になつてゐます。書下しは安永元年十二月の豊竹座で、竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七の合作です。この作の以前に寶永年間に同じ豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題して上場されてゐます。この段の内容を申上げますと酒屋といふ酒屋の忰半七がお園といふ女房が有るのにもかゝはらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ藝子に迷ひ遂に人殺しまでする。お園の父宗岸は聟の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考へるところがあつて酒屋へ復歸させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む處から一件が展開されて、お園の貞節や、捨兒のお通の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれへと續く名作であります。

（床本）酒屋の段（切）

こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛を獨寢の、お園を連て爺親が、世間構はぬ十德に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯をともし、表を締と急々と、出合頭に。詞ホヽ是は〳〵宗岸様、其處に居やるはお園じやないか、アノ母様、お替りもございませぬかと、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼る。宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿お宿にかと、娘を連て打通れば、妻は門の戸引立て、サア〳〵先づお上り成されませと、奥底も無き詞の中夫と聞くより半兵衛が、一間を出る澁々顔。詞娘を連て行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒詞イヤもふ人様に追從云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいますな、此間は嫁女の歸つて居られまして、いかいお世話でござりませふナンノ〳〵、半兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰ら

ぬ事と、無理に引立行つたのは、娘に引を取らすまい爲儕が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれふが如何爲ふが、男の方から追出すまで、取戻すと云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひ、と悔んでも跡の祭り圍めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まねば、若や病が起らふかと、見て居る親の心は闇、儕も天滿に年古ふ住んでゐれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは記れば成らぬと、年寄の顏押拭ふて來ました。何彼のことは了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下され、これ賴みます御夫婦と謝り入つたる挨拶に、お圍もうぢうぢ、手を支へ、爺樣の一徹で、無理に連られ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七樣に嫌はれるは皆私が不調法、鈍に生れた此身の科、詞今から隨分お氣に入る樣に致しませう程に猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さりませ、お二人樣と、跡は詞も涙なり詞ナ丶何のマア、其方さへ其心なら此方は變らぬ嫁姑、ノウ親仁殿、そうぢや無いか。イヤそうぢやない。昔唐に例が有る。太公望とやらいふ人の妻、夫に隙取り月日を經て、詫言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦に成らんと、太公望が云はれたと、且外講釋で聞いて來た、夫と丁度同じ事、此方の方から無理隙取つて、今更嫁と思へとは、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かずと、早う連て退しやれ〳〵と、膠もしや〳〵りも納戸口、顏も背けてゐたりける。詞ナ其腹立は尤も〳〵が、重々不調法は、此天窓に免じ了簡して、何卒嫁に、否でござる、悴めも勘當したれば、嫁と云ふべき者もない筈。サア夫も懲しめの爲當座の勘當。イヤ當座でない、七生までの勘當ぢや。ムゝ其又七生まで勘當した半七が代りに、此方は何で繩に掛つた。ヤアサア半七とは親でも子でも無い此方が、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたと、思ひも寄らぬ宗岸が、詞に惚り驚く、女房、嫁も俱々立寄つて、肌押脫せば半兵衞が、小手を緩めし羽掻締。ノウ情無や何事と、嫁はうろ〳〵、女房も取付き歎けば宗岸が。詞イヤ未だ驚くことがある、聟の半七は人殺し、お尋れ

者になつたわいのと、聞くより二人は又悔り、夫は何故如何した譯、樣子を聞かしてコレ〳〵牛兵衛殿と問へども更に返答は差俯いて詞なし。宗岸涙の目をしばたゝき、詞一昨日の晩山の口で、善右衛門を殺したは茜屋の牛七と、噂を聞いた時は、驚くまいか悔りせまいか、膝も腰も拔果しが、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた牛七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、牛七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儕も娘を取戻したら、親にかゝる首繩も無い能い事爲たと世間から譽める人も有らうが、親と成り舅と成るが、大抵深い緣かいのう。斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れてきた心はのゝ一旦嫁に遣したれば、牛七が厭がるならハテ尼にしてなと此内で、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下され、コレ手を合して賴みます、詫言が叶はれば、引放されたと突き詰て、短慮な心も出し居ろかと、案じ過して夜の目も合ず、母親は無し唯一人、彼女を思ふ儕が因果、此方の繩目も牛七が、科人に成つたら猶可愛かろ、譬へ又勘當が定でも又離切つたが誠でも、眞實親子の肉緣は、切るに切られぬ血筋の親、儕も此方程は無けれども娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はふが儕や可愛い不便でござる。これこれ聞入れて給へ牛兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き、我强う生れし牛兵衛も、舅の心根思ひ遣りオヽ道理じや〳〵宗岸殿。と、跡はないぢやくり、妻もお園も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり。牛兵衛涙の内よりもお園が顏を打守り、何から何まで氣を付けて孝行にして給る、斯な嫁が尋れたとて、最一人と有る物じや無い、世間の人の嫁鑑、牛七が事は思はぬが、其方に別るゝ牛兵衛は、能々不仕合せ、退せとむ無い、返しとむ無い、とは思へども、此方に置けば此儘若

後家。儕は夫が可愛い。いとしうおぢやる。夫で詑言聞入ぬ、了簡して呼戻さぬ。これ嫁女、必ず酷いと恨んでばし給んなや。一人の悴はお尋ね者、翌日より誰を力にせうぞ。孝行にして給はつたが、今では結句恨めしいと、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正体なく、伏沈むこそ道理なり。牛兵衛漸々顔を上げ、云はねばならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にと三人は悄々奥へ泣に行く心の中ぞ哀れなる。跡には園が憂思ひ、かゝれとてしも鳥羽玉の、世の味氣無さ身一つに、結ぼれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言、詞今頃は牛七様、何處に如何してござらうぞ、今更返らぬ事ながら、私と言ふ者無いならば牛兵衛さんもお通に免じ、子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、牛七様の身持も直り、御勘當も有るまいに、思へば〳〵此園が、去年の秋の煩ひに、寧そ死んで終ふたら、斯うした難儀は出來まいもの、お氣に入らぬと知りながら未練な私が輪廻故、添臥は適はずとも、お側に居度いと辛抱して是まで居たのがお身の仇、今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死る心が付かなんだ。堪へて給へ牛七様、私や此様に思ふてゐると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂思ひ。詞翌日はどうから父様に又連られて天滿へ往に、牛七様の不圖した果敢ない便りを聞くならば、思ひ死に死ぬで有ろ、迚も浮世は立ぬ覺悟嫌はれても夫の内、此家で死れば後の世の若しや契りの綱にもと果期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいぢらしゝ。斯る哀れも知らぬ子の合泣く聲に目や覺ましけん、一間を出て、乳飲まう乳が飲み度いおば〳〵〳〵と、お園が膝に寄添ふ子の顔見て惚り抱き寄せ、詞ヤア其方は美濃屋のお通じや無いか、爰へは如何して在つたと、不審ながらも抱上ぐれば、牛兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、詞ヤ〳〵これ〳〵嫁女添ない其心、障子の内で聞く度に、拜んでばかりゐたはいの。禮云う事も澤山あれど心の急くは此子の事、美

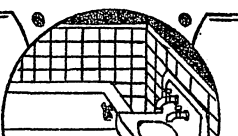
濃屋のお通と云はしやつたは、牛七と三勝の。アイお二人の中に出來たお通と云ふは此子じやわいな。ヤア〳〵親父殿聞かしやつたかオヽ聞いて居る、其又お通を、ナヽヽヽ何で捨子にして下此地へ越した是や理由が有らう、嬶懐か何所ぞに、書いた物でも無いか、早う尋れて見やと言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりと落たる一通取る間遲しと封押し切、詞ヤア何ぢや、書置の事と書いて有る。ヤア〳〵これ〳〵嫁女其方の好い目でちやつと讀やヽ。アイ〳〵、ナニナニ十度契りて親子と成る、父の恩は山よりも高きとの世の教、我身にも辨へ居候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に搦まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下され度候、別て母様の御養育。申しお前の事でござります、能ふお聞き成されませいオヽ能ふ聞いてゐますわいの。唄〳〵聞いてゐるさの障子より、波れ出る月は冴れど胸の闇。合詞エヽ時も時と隣の稽古、然して其跡は、何と書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御惠み、親父様御機嫌悪い時には、蔭になり陽になり、幾千萬のお心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。詞アヽ夫なら矢張牛七様はオイノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ、ハア彼善右衛門と云ふ奴が、大抵や大槌、悪い奴ぢや無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗ぬ義理に搦まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下され度候、別て母様の御養育。申しお前の事でござります、能ふお聞き成されませいオヽ能ふ聞いてゐますわいの。唄〳〵聞いてゐるさの障子より、波れ出る月は冴れど胸の闇。合詞エヽ時も時と隣の稽古、然して其跡は、何と書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御惠み、親父様御機嫌悪い時には、蔭になり陽になり、幾千萬のお心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。詞アヽ夫なら矢張牛七様はオイノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ、ハア彼善右衛門と云ふ奴が、大抵や大槌、悪い奴ぢや無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗〳〵〳〵わい、ア老少不定の世の中と、聞流したも今身の上、みづ〳〵とした若い者、義理に迫つて死ぬるとは。ノウ牛兵衛殿宗岸殿。思ひ廻せば廻す程チエヽ口惜いわいの〳〵唄〳〵鴛鴦の片羽のとぼ〳〵と、子に迷ひ行く小夜千鳥、無殘や牛七は今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしほしほと心に掛る我子の顔、名殘にせめば思へ宗岸殿、口惜いわいの〳〵、無念にござると述懐涙見聞くお園は以前の剃刀、南無阿彌陀佛と覺悟の體、是はと驚く、母、宗岸叶はぬ手にも牛兵衛は、漸々押へて、これ嫁女、詞老寄ばかりを跡に置き、死なうとは胴慾ぢやはい〳〵。エヽこれが死なずにゐられませうか、放して殺して下さんせ。オヽ娘、尤もぢや〳〵〳〵わい、ア老少不定の世の中と、聞流したも今身の上、みづ〳〵とした若い者、義理に迫つて死ぬるとは。ノウ牛兵衛殿宗岸殿。思ひ廻せば廻す程チエヽ口惜いわいの〳〵唄〳〵鴛鴦の片羽のとぼ〳〵と、子に迷ひ行く小夜千鳥、無殘や牛七は今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしほしほと心に掛る我子の顔、名殘にせめ

て今一目と、倶に戸口に夜の鶴、内には夫と白髪の母、心ならねど書置を又取上て讀む文章。詞人を殺し一日も、生長らへる所存はなく候へども、お通と申す娘一人ござ候て、殊にかよはき性質、不便さ餘る親心、夫に心が引かされて、今日まで長へ候へども所詮助からぬ身に候へば思召も省みずお通を遣しは候まゝ、私の小さく成しと思召され詞どれ〳〵婆見しやいの〳〵エ、私の小さく成しと思召され御養育のお世話の程くれ〳〵頼み上候。子を持て知る親の恩と、お通が不便さいぢらしさにお二人樣の御恩の程、猶更此身に浸み應へ有難奉存候、又々心掛は親父殿の御勘當相果候後にても、お赦し下され候樣、母樣宜敷お執成、是のみ黄泉の障に御座候々々、かゝ道理ぢや道理ぢや〳〵〳〵可愛やと泣聲洩るゝ表には、半七が身に應へ斯る嘆きも我故と、思はゞ今更空恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や袂を嚙締々々、泣く音止むる憂き思ひ此方はお圓が猶涙、泣々取上ぐる書置の、讀むも果敢なき世の中に、詞女は其家に在つて定まる夫一人を、頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ我等がみもち、いつしか愛想尽しきど辭も掛ず、終に一度の添臥も無候へども、其色目も致さずして、親達大事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段山々嬉しく存じまゐらせ候。今まですげなふ致せし事も、更々嫌ふでは無候へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染にて、子まで設けし中に候へば互に退去も成り難く、夫故疎遠に打過まゐらせ候。併し夫婦は二世と申す事もそふらへば、未來は必ず夫婦にて候々、詞かゝ是やまあ誠が半七樣、こりやいゝ娘、未來で夫婦と書いて有るかいや〳〵、アイ〳〵未來は未來ぢやが、一日なりと此世で女夫にして遣り度い〳〵、何とシてマア此半七は、善右衛門を

殺しましたぞ。どれ〳〵娘最少さじやどれおれが讀みませう。兎角不幸の我等に候へども、死後には嘸やお二人や、宗岸様の御歎き、嚢分々々力を付け此身に代りて御孝行に成し下されべく候、申し殘し度き事ども は數々候へども、涙に字性も見え難く、あらあら惜しき筆止申候只々お通が事のみ頼上候、此上は亡人後のお念佛、南無阿彌陀佛々々々々々々と、讀も終らず宗岸親子、又俯沈めば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ初孫の顔が見度いと心に思へど世間の義理で是まで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事と知つたらば、顔見ぬ内が増しであつた。愛らし盛りの此お通、半七と一緒に暮すなら能い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあば〳〵ばつかりオイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆と一緒に寢いよ、とはいふ者の乳も無く、今から先の寢起にも、嘸や嘆かん親々が、知らずにゐるが胴慾者、慘い心いぢらしやと、言ふ聲洩るゝ三勝が、思はず乳房を握り締め、詞乳は爰に有る物を飲まして遣たい顔見度い、乳が張るわいのうと、身を慄はせ、駈入らんにも闘の戸に空音も成らず羽拔鳥、親は外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しさ迫る内と外、一度にわつと湧き出る、涙涙花江泉川小きんを汲出す如くなり半七は齒を嚙締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿体なや、不孝を赦させ給はれと、悔み歎けば三勝も皆我故の御事と 俱に詫入る中に半七、詞何日まで泣いても返らぬ繰言親父様の御繩目、早う解くは身の最後、イザ〳〵急がんサアおぢやと立上りしが、今生の別れにせめてお顔をと差し覗けば三勝も、お通を一目と延上り、見れども親子隔ての闘何と千萬無量の想ひ、兩手を合せ伏拜み、合おさらば 合〳〵と云ふ聲も歎きに埋む我家の中

見返り〳〵死に行く、身のなる果ぞ哀れなり。半兵衛はつと心付き。詞此書置の文體では、今宵最期と決めし半七、宗岸殿も手分して行衛を尋れん、サア早ふ〳〵〳〵と身づくろひ、立出んとする所に、思ひ掛なき表より、詞ヤア〳〵方々、善右衛門を殺せし告人茜屋半七召捕つたりと呼はつて庄九郎に縄を掛、立出る宮城十内、詞半七が殺せし今市の善右衛門は、國元にて用金を盗みし盗賊召捕に來りし處、一昨夜半七に殺されし由、即ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親子に科無しと立寄つて、半兵衛が縄目解けば四人が悦び、夢では無いかと伏拜み、詞これ〳〵〳〵親父殿、十内様のお情で半七が命助かると、のう、何ぞ命の有る中に、止めて下され半兵衛殿と、急るを聞いて十内が詞何半七は死に出たとや。エヽ遲かりし殘念々々〳〵、役目なれば心に任せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、十内が花も實もある櫻井の、掟和ぐ國の名も、大和五條の茜染今色上し艷姿其三勝が言の葉を、爰に移して止めけれ。

化粧タイル　水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町一六六九
一二七六
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

この浄瑠璃は近松翁の「壽の門松」と西澤一風、田中千柳の「昔米萬石通」を併せて脚色されたもので寛延二年七月竹本座が初演であります作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作、この「引窓」は八冊目になってゐます。この段の内容を申しあげますと、人殺しをしてお尋ね者となった相撲取の濡髪長五郎はせめて一眼母親に會ひたいと八幡村へ落ちてゐたが、其家は南與兵衛として今は侍に取立てられて南方十次兵衛と名乗る家、與兵衛の義理の母お幸は長五郎の實母であるので新に名字帶刀を許された與兵衛は既に人相書まで廻ってゐるこの長五郎を召捕れば大手柄であるが、母の心も察して縄打つこともならず暮れ六つ過ぎれば與兵衛が役、女房お早も引窓を明けてまだ日が高いと言ふ、母と夫への氣の遣ひ、眼を閉ぢて長五郎を見遁してやる與兵衛の心、その義理立の溫情を拜む母お幸が子への愛着は、長五郎の前髪を剃り落して人相を變へ河内へ落してやるといふ義理人情の柵に縛られて人の世の相を巧みに描いた名作であります。

（床本）

八幡里引窓の段

出入や月弓の八幡山崎南與兵衛のお祖母我子可愛かれを出せさと諷ひし恩ひ合せば其昔八幡近在隱れなき鄕代官の家筋も今は妻のみ生のこり神と佛を友にして秋の半の放生會よみや祭りと待宵とかけ荷ふたるそなへもの、母は神棚しつらへば嫁は小いもを月代へ子種頼みのよれだんこ月の數ほど持出るコレ嫁女月見の芋はあすの晩けふは待宵殊に日の内からは早い〳〵是はしたりお前があすの放生會をけふからおそなへ遊ばす故何んにもかも宵日からすること〻チ〻笑止コレ其チ〻笑止はやつばり廓の詞大阪の新町で都といふた時とは違ふ今では南與兵衛が女房のお早近所の人がきたとたばこ吸付て出しやんなや今でこそ零落たれまへは、南方十治兵衛といふて人もうらやむ身体連れ合がお果なされてから與兵衛が放埒鄕代官の役目もあがり内證も仕もつれこなたの手前も恥かしい

事だらけ、さりながら此所の殿様もおかはりなされ新代官は皆あがり古代官の筋目をお尋れにて與兵衛も俄のお召し昔にかへるは此時と雑行なれども神いさめの供へもの蚤の息が天とやらお上の首尾が聞きたいのイヤモウそれはお氣遣遊ばすなおまへの其お心が通じて御出世でござりまし。よ早ふ吉左右聞けしましたやと待兼見やる表の方編笠にて顔かくし世を忍ぶ身の後や先見廻し立寄る門の口嬉しや爰じやとずつと入る母は見るよりヤア長五郎か母者人濡髪様か都殿是はしたり扨は願ひの通り與兵衛殿と夫婦に成つてかマア悦んで下さんせ、わしを請出した權九郎は根が慳銀仕で牢へ入る殺されたいこ持は盗人のうはまへ取りで追剝に成つて殺し德何んの氣がゞりなう添つて居やんすハテ仕合せな事同じ人を殺しても運のよいのと悪いのとハテ仕合せな事じやのイヤコレおはやしみ〳〵とした咄しじやがそなた衆は近付かアイ曲輪でのお近か付あの與兵衛もかイヤ是はつゐ一ト目知る人じやが又長五郎様がお前を母様とおつしやる譯はヘヲヽふしぎなは道理〳〵どふで一度はいはねばならぬこの長五郎は五つの時養子にやつてわしは此家へ嫁入與兵衛は先妻の子でわしとはなさぬ仲故に其譯しつても知らぬ顔あそこや爰の手前を思ひかつふつ音信もせなんだが去年開帳參りにふと大阪で見付年たけてもてゝごの讓りの高頬の黒痣もしそなたは長右衛門殿へやつた長五郎ではないかと問つとはれつ昔語り養子の親達も死失相摸取になつた咄し歸つて與兵衛に咄さうかと思ふたれど以前をしたひ尋れてもいたかと思はれるが恥しさに隱しては居たがかうしらけて來たからは戻られたら引合し兄弟の盃おはずからずに嫁共に子三人わし程果報な身の上はまたと世界に有まいと悦ぶ親の心根を思ひやる程長五郎あすをも知れぬ我命としられぬ母のいたはしやと思へばせきくる涙をかくしイヤ申し母者人與兵衛殿がお歸り有ふと拙者がごとお咄し御無用なぜ〳〵イヤ相摸取と申す者は人を投げたりほつたり喧嘩同然勝負の遺恨によつて侍でも町人でも切つて〳〵切まくりぶち放してマアそんな事私は致しませんど男を達過し

て一家一門へなんぎのかゝる事も有るものまあ此商賣仕廻まではおまへともあかの他人悴持つたと思し召して下さるな何ん時しれぬ身の上是がお別れにならふも知れずおはや殿與兵衛殿へも母の事賴みまするといふて下され長崎の相摸に下りますればながふお目にかゝりますまい隨分御息災でおくらしと打しほれればヤレそんな商賣せいで叶はぬか長崎へもどつこへもいかずと此内に居て與兵衛と倶に間談合其恰朴では何さしたとて仕かれはせまいノウおはやそふでござりますとも御兄弟といふ事ぬしも聞ましたら悅ばれましよマアお茶漬でもナお袋樣イヤ〳〵初て來たもの鱠でもしませうあのからだへは牛蒡の太煮鮑の料理が好で有。氣が晴れてよい二階座敷淀川を見て看にして一つ呑やうぢ〳〵せずといきやいのどりや拵よとまな板や薄刃の鍋は身より出死出の出立ちの料理ぞと思へばいとゞ胸ふさがり申し何んにもお構ひなくともかげ椀で一つ盃切ついたべて歸りましよと母の手盛を牢ぶちと思ひ諦めたばこぼんさげて

二階へしほれ行人の出世は時知ず見出しに預り南與兵衛衣類大小申請伴ふ武士は何者か所目なれぬ血氣の兩人家來も其身も立とゞまり是が貴公の御宿所となイザ御案内お先へと互に辭儀合ひ南與兵衛いそ〳〵として内へ入母者人女房只今歸つたヤアお歸りか戻りやつたかお上の首尾はどふじやの〳〵お悅びなされ極上々ソレハ嬉しい。則ち此如く衣類大小下し置かれ名も十次兵衛と親の名に改め下され昔の通り庄屋代官を仰付けられ七ケ村の支配ヤレ〳〵それは目出度い事ム見れば表にお歷々が見へるがありやマアどなたぞあれは西國方のお侍密々に仰せ合さるゝ事有てご御同道さして隱す程の事ではなけれど暫く母人も御遠慮女房も用事有迄差控へよと言渡し表へ出れば姑嫁姑今からは武士付合遠慮が多いと物馴し母と嫁とは立別れ奥と口とへ入にけり

イザお通りと兩人の武士を上座へ押直し今日殿の御前にて仰付けられし密の御用仔細は各〳〵方に承はれとの儀先其お尋れ者の科の樣子お物語と尋れば年がさなる侍取あへず拙者は平塚丹平是成は三原傳藏と申て主人の名はお上みにもよく

御存知當春大阪表にて兩人の同名ともを殺され方々と詮議いたせど討たる相手行衛知れず此間承れば此八幡近在に由緣有て立越たと申、去るによつて當役所へお賴申せしに兄弟の敵隨分見付け召捕れよ併し夜に入ては當地不案内所に馴たる者に申付縄かけ渡さんと有てナソレ貴殿へ仰付られた仔細と申は斯の通りと語るを一間に母親が耳そば立つればこなたには女房お早が立聞きの虫がしらすか胸騒ぎ興兵衛は何んの心も付ず然らば敵討同然穏密〳〵もし左樣の儀も有ふかと母女房迄退け御内意を承はる何んと其討たれさつしやつた御同名の御名はな身が弟は郷左衛門手前が兄は有右衛門アノ平塚郷左衛門三原有右衛門とな、いかにもフムウ御存知かなイヤ承はつた樣にもム〜して其殺したる者は何者サア其相手は相撲仲間で隠れもなき濡髪の長五郎と聞て母親障子をびつしやり。おはやは運ぶ茶碗かぐはつたりハテ不調法なと呵る夫の傍に座し猶も樣子を聞ゐたるシテ御兩所は何國を目充先此丹平は當所を家捜が致したい御尤〳〵傳藏殿には思し召寄は何と、手前が存るには最前其元へお賴申た繪姿を村々へくばり置き油斷の体に見せどか〳〵と踏込牛部屋柴部屋或はコウ二階などを吟味致したいてへ〜〜〜夫も尤アゝ大きな体下家にはおりますまいとかく二階が心元ない、先御兩所は楠葉橋本の邊を御詮議なされ夜に入らば拙者が請け取譬相撲取でござらふがやはら取でござらふが見付次第に縄ぶつてお渡し申さん其段そつ共ヤレ〳〵其詞を聞て安堵〳〵イザ丹平殿楠葉邊へ參ふか、いか樣日の内は隨分我々働夜に入てお賴み申が肝心早お暇然らば又晩程役所にて御意得ませう左樣〳〵と目禮し二人の武士は立歸るおはやは始終もの案じさしうつむいてゐたりしが申興兵衛樣あちな事を賴まれなされ長五郎とやらを捕つて出そとの請合はそりやマアおまへほんの氣かへハテけふとい物の言樣あの侍に由緣もなく元より長五郎に遺趣もなけれど今の兩人が願ひによつてお上より此興兵衛に仰付けられた其仔細はアゝ彼の關口流の一手も覺ゐる事お聞及び有てやナニ役人共に申付ける筈なれ共當所へ

來て間もなく不案内住馴た其方に申付ける日の中はあの方よく詮議せん夜に入ては此方よりすみ〳〵迄詮議し何卒搦捕て渡せ國の譽と有ての御頼みイヤモ一生の外聞召捕て手柄の程を見せたらば母人にも嘸お悦びイヤ〳〵〳〵何のそれがお嬉しからふぞ。なぜ。ハテ昔はとも有れきのふけふ迄は八幡の町の町人生兵法大疵の基とひよつとおけがでもなされた時はお袋様の悲しみ何のお悦びでござんせふイヤいらざる女の差出。わりや手柄の先をおるかハテ折も一つはお前の爲、ヤアこいつが、何で濡髪をかばひ立て但しは儕が一門か何にもせよ御前で請合見出しに合た此與兵衛今迄とは違ふ詞かへさば手は見せぬときつば廻せばヤレ夫婦の爭ひ必無用と母は一間を立出最前からの樣子殘らずあれにて聞ました、何んと其濡髪の長五郎といふ者そなたよふ見知つてかサレバ一度堀江の相撲で見受其後色里にてちよつとの出合イヤモ隱れもない大前髪たしか右の高頬にほくろ見知らぬ者も有ふと有つて村々へ配る人相書コレ御覽なされと懷中より出して見せたる姿繪をどれと見る母二階まり覗く長五郎手水鉢水に姿が寫ると知す目早き與兵衛が水鏡きつと見付けて見上るをさときおはやが引窓ぴつしやり内は眞夜となりにけるこりや何とする女房ハテ雨もぽろつく最早日の暮灯をともして上ませふムウハテナはてなあ面白い〳〵日が暮たれば與兵衛が役忍びおるお尋者イデ召捕んとすつくと立ちそれまだ日が高いと引窓ぐはらり明て言れぬ女房の心づかひそせつなけれ母は手箱に嗜し銀一包取出し是はコレ御坊へ差上永代經をよんでもらひ未來を助からうふと思ふ大切な銀なれ共手放す心を推量して何と其繪姿わしに賣てたもらぬかムウ母者人二十年以前に御實子を大阪へ養子に遣はされたと聞たが何と其御子息ば今に堅固でござるかな與兵衛村々へ渡す其繪姿どふぞ買たいハアー鳥の粟をひらふ樣に溜置かれた其銀佛へ上る布施物を費しても此繪姿がお買なされたいか未來はならくへ沈むとも今の思ひにはかへられぬわいのハアぜひもなやと大小投出し兩腰させば十次兵衛丸ごしなれば今迄の通りの與兵衛相かはらず八幡

の町人商人の代物お望ならばへゝ上げませふわいあの賣て下さるかそれではこなたのアイヤ申し日の中は私が役目ではござりませぬハアゝ添けなやさいたゞく母袖はかはかぬ涙の海嫁は見る眼を押拭ひイヤ申し與兵衛様あんまり母御様のお心根がいたはしさに大事の手柄を支へました嘸憎いやつ不届者とお呵も有ふが產の子よりも大切にかわいがつて下さる御慰せめてはお力にと俱々に隱しました常々からも萬事の品包むと思ふて下さんすなと中に立身のせつなさを言譯涙に時移り哀れ數添ふ暮の鐘くまなき月も待宵の光り移ればや夜に入れば村々を詮議する我役目アゝ河内へ越る拔道は狐川を左りに取右へ渡つて山越に〳〵アよもや夫へは行くまいとそれと知してかけ出る情も厚き藪だゝみ折から月の雲隱れ忍びて樣子を窺ひ居るこたへ兼たる長五郎二階より飛で降り表をさしてかけ出すを母は抱き留めヤイうろたへ者どこへゆくイヤ最前より尋常に繩かゝらうと存じたれ共あんまりと申せばお志の有がたさ眼前歡きを見せませふよりは此家を離れてともこたへにこたへておりましたが與兵衛殿の手前もあり後よりぼつ付きさられる覺悟御赦されてとかけ出すをとつて引すヘヤイ爰なものしらずめおれ斗りか嫁の志與兵衛の情迄無にしおるか罰あたりめなさぬ仲の心を疑ひ繪姿を買はふと言ひかけたは見遁してたもるかたもらぬかと胸の内を聞ふ爲、賣つてくれた其時の嬉しさおりや〳〵後影拜んだ〳〵はやいまだ其上に河内へ越る拔道迄おしへてくれた大恩をおのれや〳〵何と報ぜうと思ひ居るぞいやいコリヤヤイ死る斗りが男ではないぞよ七十ちかい親持て喧嘩口論人を難すと言ふ樣な不孝な子が世に有ふかくると其儘かげ椀に一膳盛と望んだはおのりや〳〵牢へイヤサ牢へ入覺悟じやな、それかどふ見てゐられふぞ〳〵せめて親への孝行に遁れるだけは遁れてくれコリヤ生られるだけは生てたも何の因果で科人になつた事じやとどうと伏前後不かくに泣叫ぶおはやも俱にせきのぼす涙おさへて申〳〵泣てござる所じやないぞへ夜が明くれば放生會で人立が多い今宵の内に落す思案どふぞ姿をかへる仕樣は有ま

いかなチ、其れも心付いて置ましたまあ目に立つこの大前髪剃落しましよドレ剃刀アイヤ申母人姿をかへて縄か、らばよく〳〵命がおしさにと言れるも無念な侍を殺した場で直ぐに相果ふと存じましたが死れぬ義理にて生ながらへ一日〳〵と親の事が身にしみま一度お顔が拝みたさにお暇乞に参つて返つて思ひをかけまするはいアヽイヤ〳〵やはり此儘で興兵衛殿へお渡しなされて下さりませムヽスリヤどふ言ふても縄かゝる氣じやな覺悟致しておりまするよいは勝手にしをれわれより先にと剃刀をア申母者人あぶない〳〵誤りました〳〵〳〵サアそんなら剃て落してくれと母が手づから合せ砥にかゝる思ひの有ふとは神ならぬ身のしらがの此身剃べき髪は剃もせで祝ふて落す前髪を涙でもんで剃落す老の拳の定まらずわな〳〵震ふて又先がきつくりアヽ申二た所迄お顔に疵がアヽひよんなしました幸ひ血留の硯の墨べつたり付けて顔打ながめ大かたこれで人相がかはつたが肝心の見知は高頬のほぐろ剃落さんと剃刀をあて事はあてながら是こそはてゝごの讓り筐と思へば嫁女わしはどふも剃りにくいこなた頼む剃落して下されば私じや迚むごたらしうそれがどふ剃らるゝ物、是斗りはお赦しなされて下さりませ〳〵アヽ思へば〳〵親の筐まで剃落す樣になつたかエヽ心からとは言いながらかはいの者やと取付てわつと斗りに泣沈む折もこそ有れ門口より濡髪取つたと打付る銀の手裏劍高頬にぴつしやりはつと身がまへ母はたておはやはり灯立覆ひ今のは慥連合の聲長五郎樣顔のほぐろが潰れたぞヘヤアほんに眞に是も情けと母親は表を拝みゐたりしが兼て覺悟の長五郎思ひ設けてどつかと座しサア母者人お前のお手で縄をかけ興兵衛殿へお渡しなされて下さりませコレ長五郎樣お前は氣がのぼつたかとつたと顔へ打付てほぐろを消した連合の心又この打付た銀の包に路銀と書た一筆そこにお心付ぬかへイヤ其書付もほぐろを消した心も骨にこたへ肝に通りあんまり過分添なさに母の歎きも御意見も不孝の罪も思はれずかたわな子が可愛いとぎりも法も辨へなく助けたい〳〵と母人の御慈悲心暫くは心休めと詞に隨ひ

元腹迄致したれ共一人ならず二人ならず四人迄殺した科人アヽ助かる筋はござりませぬ、なまなかな者の手にかゝらふより筐と思ひ母者人泣かず共縄をかけ與兵衛殿へ手渡しゝてよふお禮をおつしやれやヤコレそなふてはこなた未來の十次兵衛殿へ立ますまいがのアヽ誤つた長五郎よふいふてくれたないかさま思へばわしは大きな義理しらず誠をいはゞ我子を捨ても繼子に手柄さするが人間畜生の皮かぶり猫が子をくわへあるくやうに隱しとげふとしたは何事、とても遁れぬ天の網一世の縁のしばり縄おはや其ほそ引でも取て下されイヤそれでは連合の心を無になさるゝと申もの唐天竺へござつても此世にざへござればどふしてなりとも又あはれる何かはなしに落ましして下さんせ〳〵イヤのふ。一旦かばふたは恩愛今又縄かけ渡すのはなさぬ中の義理畫はかばひ夜は縄かけ晝夜と分る繼子本の子慈悲も立て義理も立つくさばのかげの親々への言譯覺悟はよいか、待兼ておりまするとおはやを取て突退〳〵手を廻すれば母親は幸ひ有あふ窓の縄追取て小手縛り突放せば引縄に窓はふさがれ心は闇くらき思ひの聲はり上げ濡髪長五郎を召捕たぞ十次兵衛は居やらぬか請取て手柄に召されと呼聲は與兵衛はかけ入お手柄〳〵左樣なふては叶はぬところとても遁れぬ科人請取て御前へ引女房どももふ何時されば夜半になりませふがヤアたわけ者めが七ツ半を最前聞た時刻がのびると役目があがる縄先き知ぬ窓の引縄三尺殘して切るが古例目ぶんりやうに是からとすらりと拔いて縛縄すつかり切ばぐはら〳〵〳〵指込む月に南無三寶夜が明た身共が役は夜の内斗り明くれば則ち放生會生を放す所の法恩にきず共勝手におひきやれハヽはつと悦ぶ嫁始あはせ兩手のかずよりも九ツの鐘、六ツ聞いて殘る三ツは母への進上拙者が命も御自分へそれも言はずとさらば〳〵さらば〳〵の暇乞別れてこそは落て行く

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

元文二年一月竹本座に上場された文耕堂、三好松洛の合作になり、全五段ものでこの『辨慶上使』は第三段目であります。作全体の内容は、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が源義經の間罪使となつて上洛します、梶原は義經を陷れて、己れの非を蔽はんとの魂膽、土佐坊は是を知つて、義經を庇護せんとの心、かくて二人の入洛によつて、義經主從とこの二人の間に様々の葛藤波瀾を起す次第で、この辨慶上使の段の梗概は左の通りです。

義經の室の郷の君は平時忠の娘であるところから賴朝は若し義經が平家と通じて居らぬなれば郷の君の首打つて渡せとの難題を嚴命します郷の君を預る侍從太郎の舘へ首切る役の上使は辨慶であります。辨慶は主の爲には姫の首を打て賴朝の疑念を晴らすが得策と考へてきたが、郷の君の美しい御氣色、殊に御懷胎の様子を見てはそれも忍びず當惑してゐるとき眼に付たは腰元しのぶであつた。しのぶはおわさの娘で郷の君に瓜二つの容貌に打喜んだ、おわさの述懷から、辨慶が、まだ書寫山の稚兒時代本陣の娘と月待の夜假寢の契を結んで懷姙した子供が信夫と判つた、辨慶はお主の身代りに我子を一思ひに刺し、始めて遭ふた我子に敢ない別れをするといふ情懷つきぬ好箇の名作です。

（床本）　辨慶上使の段（切）

ともに出向ふ程もあらせず入來るは堀川御所に隱れなき智仁勇の其骨が ら、忠臣の鑑とは唐土の豫讓我朝に、て其一人と呼れたる武藏坊辨慶へり塗取て打かづき、大紋の袴ふみしだき、しづ〳〵と打通りむづと座して一禮し、ホヽウ存じたとは違てみづ〳〵とした御顏色、先安堵仕ると申上れば卿の君ヲヽ我君様にも御機嫌能ましますかと、御詞有れば武藏坊、ハヽア其御仰の健さ、是と申も侍從御夫婦の御介抱、御大切になさるゝ御苦勞のかいが見へ、祝着に存るよ、是は〳〵御挨拶、御主人ながら御平產有までは、我舘に預る卿の君

樣、義經公の御前幾重にも御執成、アヽイヤ〳〵執成には及ばぬ、總て物事の執成といふはかなれ八合な事を十分に言が執成、此辨慶それきらい、見た通りを罷歸り、眞實に申なば、君にも嘸御滿足、扨是は御夫婦への咄しではない、後學の爲卿の君樣へ御物がたり、アヽ惣じて勇士の戰場へ趣く時は三忘と申て忘るゝ事三つ有、まづ國を出る時家をわすれ境を過る時、妻子を忘れ、敵陣に臨んでは我身を忘るゝ、婦人の懷胎も先其如く、既に月滿、御産のひもを解るゝは彼勇士の敵陣へかけ入て是ぞ能敵ござなれ、遁すまじと引組で首を取るか取らるゝか、よい子を産むか得産ぬか、生るか死ぬるか、生死の境が爰をよく御合點なされ、かれてなき身と思召さば、其期に臨んで不覺をさらぬ、ヤ拍子に乘つて馬鹿な事を、ハヽヽヽヽヤ肝心の御内談遲なはる、爰は端近密に御意得たし、しかし、あれに見馴ぬ女、わりや何者だ。ハイ、私はわゝさと申て、是なる腰元信夫が母、卿の君樣をお見舞に、參りし者でござりますと、言ふに花の井引とつて、今あの者が申す通り、我家の奥勤めも同じ事。憚りながらお心置なく御内談、アヽイヤ〳〵かれを始め女中方、間を隔て遠慮召れ、サア君樣、奥方、侍從殿、奥へ參らふか、イザお通り御案内と卿の君を誘ひて、侍從夫婦は先に立、後に引添武藏坊、鎌倉殿の難題を、つい打明けて言ば得に、暫く心奥の間に、打つれ伴ひ入りにける

年若けれ共悧潑もの、信夫差配しなふ皆樣。何事の御内談お隙が入ふも知まいに、お盃でも出してはの、チヽそれ〳〵お煙草盆、お茶持て行ぞや夫はお慮外、次手にお菓子も賴ぞや、さらば此間にちよつとかゝ樣、此頃はお顔も見ず、おなつかしやと立寄ば、チヽそなたも息災で嬉しい〳〵明くれ傍に引すへて、見れども あかぬ一人子を、手放して置親心、親なつかしと思ふより百千倍さはしらぬかや、たとへ御前の御意に入る共、必ず〳〵朋輩衆をそでにすな、出かし立してそれまるゝな、林の中にも高い木は風が枝をば折そとよ、一人寢覺の度毎に、ためて置た數々もあへば嬉しうて口へ出ぬ、何をいふも身を大事に、コレ煩ふてばした

もんなと、手を取かはす親と子の、わりなき風情ぞ道理なり。やゝ有て侍従夫婦奥より出る屈託顔、おわさ目早く是は〳〵二方様、どふやらお顔の色悪ふ、お氣の浮ぬ御容体、御内談と申は何事でござります、と言ふに花の井差寄て、さればいのふ、今日武蔵殿参られしは、義經公には叛逆人時忠の娘卿の君を妻と定め居るからは是同腹、一味でなくば姫君の首討て渡せと、鎌倉殿の御難題、おちいさい時から夫婦の者が手しほにかけ、育上げた姫君様、そもやお首が切れふか、何とやいげが當られふか、殊に只ならぬお身の上、辨慶殿も切兼て、とつゝ置つ思案の上、お身代りを立まいか、チヽ夫ぞよろしき御分別、サ其かはりは誰彼とせんぎの上、年の頃めかたち、相應した此信夫正眞の脊に腹とやら、コレ了簡は有まいか、夫婦の者の苦しみを、思ひやつてと斗にて、かつばと伏て泣ければ、夫も座したる膝を改め浮世の中の無心といふに、是に上越無心も有まい、其返報には夫婦の者を八ツ裂にもなされ、サちつとも惜まぬ、惜まぬ命ば二つ有共一つもけふの役に立ぬ、ほいなさ無念さ悲しさを、推量有とはら〳〵涙、始終の様子聞く信夫、涙を押へ傍により、十年に餘る宮仕へも、たつた一日御奉公申ても、お主様に違ひはない、其御難儀が何と聞て居られふぞ不束な此身でも、お役にさへ立ならば、願ふてもないお身代り、サア御用に立て下さんせと、聞もあへず、走り寄、娘をしつかと抱しめ〳〵、アコレつか〳〵〳〵ともの言やんなハイ〳〵イヤ申、此子はアノ私一人で出來た子ではござりませぬ、顔も知らず名もしらぬ爺親が御座ります其親を尋れ手渡しする迄はアヽコリヤ〳〵〳〵いかにうろたへたればとて母親斗りで出來る子が三千世界に有ふと思ふか、ヱヽ其上顔もしらず名もしらぬ爺親を尋手渡しするとは何をしるしに尋るぞ、偽り者、表裏者め、コリヤヤイ、子心にさへ主従の道を辨ふるに、見限り果たる女め娘を連れ早歸れ、サ花の井こちへと立上る、なふコレ待て下さりませ、偽り者と言れては親故此子の道立ず顔もしらず、名もしらぬ、夫を尋るしるしは、是と上の一重を押脱ば、

右はかはらぬ詰袖に、左ばかりは振袖の、濃紅の染模様、橘ならぬ袖の香の昔床しく忍ばしく、娘が聞前恥かしき昔咄し」私元は播州姫路の近在福井村、本陣の何某こそ、私が父母、十八年以前、頃は夜も長月の廿六夜の月待の夜、數多泊りの其中に二八餘りの稚兒すがた、こつちに思へば其人もすれつもつれつ相生の松と松との若みどり、露の契りも縁のはし、チヽ恥かしやつい、暗りの轉び寢につらや人の足音に戀人も驚きて、起行く袂ひかゆるを、振切急ぎ行く拍子、ちぎれて我手に殘りしは此振袖、かり寢の情は淺けれども妹脊の縁も深かりけん、其月より身も重く懐胎し、後にて何と詮方も、産落せしは此信夫、縁あればこそ子迄もふけしもの、此振袖をしるべにて、再び尋逢んと國を、〳〵出て十七年、水子をかゝへさま〴〵とさまよひめぐりしうき艱難、今に尋逢れ共女の念力、是こそは娘よ父よと名乘合するそれ迄は、身にもかへぬ大事の娘、お役に立ぬは右の譯、卑怯未練でない申し譯、娘にはどふぞお隙を下さりませコレ信夫サヽ立ちや〳〵エコレハヽシタリ立ちやいの、と言へど立兼見捨かれ、親子心の隔ての一重、始終聞入武藏坊、信夫が脊骨障子越ぐつとさいで一抉り、うんともだゆる苦しみに、こは〳〵いかにこはいかにと、傍で見る目の三人はあきれ果たるばかりなり、母は泣やら氣は狂亂、扨は夫婦と言ひ合せ大事の〳〵娘をむごたらしい、サア元の樣にしてかへしやと、武藏にしつかとすがり付、泣より外の事ぞなき眞中に辨慶どつかと座し、コリヤ聲びくにほざきおらふ、刻限來れば疾ひなくも、障子越の一抉り、是には深き仔細有る事、とこぼへずと是見よと、押肌脱ばこはいかに、下着の衣の紅ひに、大振袖の伊達模樣ヤア其振袖はチヽ此片袖はそつちに有筈日外播州福井村にて人目を忍び暫しの假寢扨は汝で有たよな、エヽそんならお前が其時のアノお稚兒樣かいな、チヽ書寫山の鬼若丸だ、エヽすりやア眞實の我子じやないかいのふ。チヽ、サ始てつら見る假寢の爺親、殺したはお主の身代りだは、ハアはつとばかりに母親はコレ娘あれ聞やつたかいの〳〵そなたの爺御と

いふはアノ辨慶様じやといのふ〳〵サヽちやつと御對面申上やいのと、抱き起せば起されて、母様、何やらおつしやるそふなが耳が聞へぬもふ目が見へぬわいの、私しや今爰で殺れて、お主様の身代りに立と思へば嬉しいが、親一人子一人の私に放れたよりないお前のお身が案じられ、それば かりが黄泉のさばり、イヤ申し御夫婦様、便りのないかゝ様、どふぞお頼み申ます、又かゝ様も今からはお二人様を大切に、お身を大事に長生して、とゝ様に廻り合、中よふ暮して下さんせ、又折々は私も、不便と思ひ朝夕の御回向頼み上ます る、そればかりといふ聲も女第々々にせぐり來て、早玉の緒も切果て、此世の縁は切にけり、ハア悲しやと氣も亂れ、母は死がいを抱き上げ、コレ信夫今一度ものをいふてたもいの、是が〳〵一世の別れかいのふ〳〵いふて返らぬ事ながら、春丈伸るにしたがいて只とゝ様に逢たいとしたふも我子私も又どうぞ逢たいとゝ尋ねさまよひ國々を廻り〳〵て今爰で逢ぬがましで有たもの、死る今はの際迄も誠の父としらずして母をかばひし心根がいぢらしいやら悲しいやら、此胸をさく様な、同じ殺す道ならば、互に父よ娘かと名乗合した上ならば、此思ひはエマあるまいもの、浮世に心殘るであろ、是ばかりに引されて、三途の川と死出の山、迷ふてたもんな迷はぬやう道は一筋ばる〳〵ぞや、法の光りやともし火のかげを力にとぼ〳〵と、歩む姿を目のさきに、今見る様におもはれて、可愛はいのとばかりにて、空しき死骸を抱しめ、聲も惜まず泣居たる。辨慶涙押かくし、汝が咄し聞くと等しく、扨は我子と飛立ばかり、生顔を見かりしが、アヽイヤ〳〵なま中に見つ見せては、未練な心も起らんかと、腕に任せて抉りしもの、ひとたまりもこたへふか、我生れてより此年まで後にも先にもコレ御夫婦、たつた一度でござつた、アヽほて轉合な事をして、生れし我子と聞よりも憎からふか、可愛かるまいか、其様に泣を見て、太郎夫婦が居やらずばと、泣より泣ぬくろしみは、コリヤ鳴蟬よりも中々に鳴ぬ螢の身を焦す、小唄も我身に知れたり、是に付ても親の恩、今取わけて

思ひしる、唐土の樊噲が母の小袖を母衣と名づけ戰場まで持たりといふ。それを覺ぶにあらねども、此着下は母の手づからくだされしを、汝に片そでをさられたども、なき母に添心地して縫も直さず、振袖の此儘四國九國、一の谷へも押寄々々危き難を遁れしも、是ぞ誠に親の影、年月重れ肌身放さず持し故、名もしらず顔もしらぬ親と子の印となつて十七年目に廻り合主君の絶体絶命の大事のお役に立る事、偏に亡母の賜はりし此小袖に手を通し、親子一所に引合せ賜ふとは〻ハい〻〻廣大無邊の親の慈悲、チ〻能死だ出かしたな、とは、言ひつ〻も息ある中、我こそ尋る爺御ぞと、こんな頼でも見せたらば、嘘嬉しがらふもの、是ばかりが殘念と瞋で拂ふ包泣、侍從夫婦が貰ひ泣、四人が涙、八つの袖、八つの時計に打交ぜて、生れの時の產聲より外には泣かぬ辨慶が、三十餘年のため涙一度に亂すぞ果しなき、武藏心を取直し、なむ三寶早八つ時、サア太郎殿郷の君の御首討て渡されよチ〻心得たりと信夫が死骸引よせてあへなく首を討落し、返す刀を我弓手の小脇にぐつと突込たり、人々是はと立騷をヤ騷ぐまい武藏殿我切腹御合點だ參らぬか、卿の君の乳人とは、鎌倉殿もしろし召れたる、侍從太郎が此首を添て渡さば天地を見ぬく梶原も、造り花とはよも言ふまいサア武藏殿と、きうつるはや首討てたべ、チ〻合點と拔はなし、ひらりと見へし刀の影、首は前にぞ落にける。立直つて大音上、ヤア門前にひかへし者ども慥に聞け、郷の君の御首侍從太郎二つの首を只今受取立歸るぞ、それとしらすは胸有て館へひぐくばかりなり、すぐに袂を押切〳〵二つの首を包に餘る目にもるゝ涙よ歎き果しなき、さらば〳〵と首を左右にかき抱き立上れば、是なふしばしと取付て我は未來に約束せん我は親子の一世の限り俱に名殘に今一度亡顔見せてたべなふと泣どしたへど、こがるれど、心强く振捨て見せぬもつらし見ぬもうし、かへらぬ道にあこがるゝ夫の別れ子の別れ、二つなげきを一すじに見捨て御所へぞ立歸る。

四ツ橋畔 より

文樂座消息日誌

六月興行
七月・八月の消息

△六月一日（木）
土佐古靱若手連の六月興行初日

△六月三日（土）
大衆普及興行のマチネー開催
遞信省關係者八十五名他

△六月四日（日）
マチネー開催
遞信省關係者、市電關係者

△六月四日（日）
古靱友次郎の「守宮酒」舞臺中繼にて放送

月十二日（月）
學御在學中の東伏見伯御來座
妃殿下、東本願寺裏方御同伴

△六月十四日（水）
文樂會開催

△六月十八日（日）
打上げ

△七月一日
一日より十二日まで十二日間東京劇場へ出張公演（藝題三日間宛四回替り）
土佐（吉兵衛）古靱（友次郎）錣（新左衛門）相生、つばめ、鏡、南部、小春、（仙糸、吉彌、重道、團二郎、清二郎、吉左）
（榮三、文五郎、玉次郎、玉七、政龜、玉松、紋十郎、王幸、門造、扇太郎）

第一回
本朝廿四孝　桔梗原より火迄
狐（錣、南部）
近頃河原達引　堀川猿廻し（土佐）

秋つはの食美
御宴會はづま

皆様位本・感じのいい
南一溫泉料理へ

四ツ橋

お電話の用御は
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

のまさなみ
南一溫泉料理

義經千本櫻　椎の木より壽し屋迄（鏡、古馝）
妹脊山婦女庭訓　道行戀の小田卷（小春）

第二回
加賀見山舊錦繪　草履打の段より奥庭の段迄（鏡、土佐）
艶容女舞衣　酒屋（鏡、土佐）
岸姫松鞘鑑　飯原兵衛屋敷（つばめ、古馝）
假名手本忠臣藏　道行旅路の嫁入（小春、鏡）

第三回
生寫朝顔日記　船別れの段より宿屋（小春、相生、土佐）
染模樣妹脊門松　生玉の段　質店の段（つばめ、古馝）
御所櫻堀川夜討　辨慶上使（鏡）
壇浦兜軍記　阿古屋琴責（南部、相生、鏡）

第四回
繪本太功記　配膳の段より尼ヶ崎まで（相生、つばめ、古馝）

紙子仕立兩面鑑　大文字屋（南部、土佐）
三十三間堂棟由來　平太郎住家（鏡）
碁太平記白石噺　揚屋（小春）

△七月二十二日
二十二日初日二十七日迄（六日間）
神戸松竹劇場（若手興行）

第一回
伽羅先代萩　政岡忠義（小春）
心中天網島紙屋内（南部）
繪本太功記尼ヶ崎（つばめ）
生寫朝顔日記宿屋大井川（相生）
御所櫻堀川夜討　辨慶上使（鏡）

第二回
平假名盛衰記　逆櫓（鏡）
攝州合邦辻　合邦内（つばめ）
艶容女舞衣　酒屋（南部）
近頃河原達引　堀川（相生）
本朝廿四孝　十種香狐火（小春）

第三回
碁太平記白石噺　揚屋（小春）
一の谷嫩軍記　陣屋（鏡）
伊賀越道中双六　沼津（相生）
菅原傳授手習鑑　寺子屋（つばめ）
三十三所靈坂寺　澤市内御山（南部）

△八月十八日
京都南座（出張興行二十五日まで）
（八日間）若手一同出演

現代的
廣告は廣告社に限る
大阪市南區御蔵跡町九
齋部太郎經營
電話戎三七五六番

斷然好評裡に公開中

果然旋風的絶讃裡にある

見よ！前世紀巨大獸の跳梁

キング・コング

松竹樂劇部女生總出演

秋の豪華版

大レヴュー

青夜調 七景

大阪歌舞伎座

中座

一日初日

・松竹家庭劇・

第一 友達の舌 一場

第二 母親の嫁入 二場

第三 祇園夜話 戀の繪日傘 五場

第四 地藏盆 三場

第五 危險信號 三場

浪花座

一日初日

・雪洲・直江第二回公演・

第一 三萬兩五十三次 二幕五場

第二 八幡屋の娘 一幕二場

第三 楠公父子 一幕

第四 シカゴ暗黑街 ギヤング奇譚 兄弟 三幕

角座

一日初日

快笑の秋：最高の番組

張學良に肘鐵砲をくらわせた美女 ハイ

斐龜子道頓堀初出演

漫才萬歲大會

吉本專屬名流網羅

十二日開演

・新組織劇團・

享樂列車

旗擧公演

松竹座

近日封切

カンターの鬪牛師

雨へル・ピロウ

戀の凱歌

驚散響

と鷹り行く魂け應援歌

朝日座

近日封切

出來心

僕の丸髷

理想の艮人

想出の唄

足輕突擊隊

敵への道

大村鐵太郎

鯉名の銀平

辨天座

近日封切

新らしき天

その夜の花嫁

母三人

燃ゆる富士

劔鬼三人旅

焰魔地藏

昭和八年九月八日印刷
昭和八年九月九日發行
編輯兼發行人　大塚良三
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷者　永井太三郎
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所　永井日英堂印刷所

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。

御携帯品は

御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。

當座御使用の

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は年勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。ムシタオルはレートローション使用。

四ツ橋　文樂座
前賣切符專用電話南四七一二番
電話南　七四〇八番
三七八八番

生寫朝顔日記
錄倉三代記
艶容女舞衣
双蝶々曲輪日記
御所櫻堀川夜討

新製品
ート白粉
レートオオ水白粉
レートオオ粉白粉
レート液蝶
blanc de lait
東京 平尾賛平商店